
レイニーソング

梶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイニーソング

【Nコード】

N6825Y

【作者名】

梶

【あらすじ】

高校生歌手・雨宮小夏として名をはせる少女、瀬尾小夏。はりのあるその歌声で音楽界をリードしていたのも、もう過去の話。
彗星のごとく現れた新人歌手・S H E E N A^{シーナ}により、ランキング上位の座を奪われてしまう。それからにはなにをしても失敗続きの小夏は、どこへもやりようのない思いを胸中に抱えていた。しかもそのS H E E N A、素顔も性別も年齢も非公開の覆面歌手で……。自サイトにも掲載予定です。

覆面歌手の名は

あの空を、貫くすべならここにある。

声という名の矢を放ち、空へ。手を伸ばしても届かない、はるか高みへ声を響かせる。雨のように降り注ぐ音たちをつかんで、息を大きく吸いこみ、翼を広げ、さあ 歌を、

（ あ ）

思った瞬間の失速。そして、失墜。心に空いたすきまに、ひとつのピースをとり落とす。

その瞬間にきらめく世界は色を失い、薄灰色にあせていく。こぼれていく音の雨。すぐに取り戻せ、と必死に声を張り上げても、落ちていったものは拾い上げられることをかたくなに拒む。音圧が失われ、現実が近づいてくる。真っ暗に沈みゆく視界と、感情の消えていく音楽が小夏を襲う。

（ いや……お願い、待って ）

懇願しても、けっして戻らない。

伴奏の余韻がぷつりと途絶える。

ヘッドフォンからなにも聞こえなくなったのを確認してから、重い息をついた。

曲が終われば自然と周りに満ちる、完全な無音が耳に痛い。自分を責め立てるようなそれから逃れるようにスタジオの外をふり向くと、窓の向こうのふたりはそろって首をふる。

予想していた答えではあった。

歌うさなかに浮かび上がった違和感は、最後の最後まで消えずにくすぶりつづけた。歌った本人さえ満足できないような歌が、他人に受け入れられるはずがない。

最近はいつもこうだ。歌っても歌っても、はしから違和感がわいてくる。リテイクをくり返すほど声は疲れ、それでも違和感は大き

くなるばかりで、いつかは歌がきらいになってしまいそうで怖くなる。

「すみません、今日はもう」

申しわけなさでいっぱいになりながらマイクに伝えて、うつむいた。マネージャーの野宮が表情をゆるめてうなずいたので、怒られることはないみたいだとほっとする。

スタジオの扉を開けると、とたんに雑音が耳にはいりこんでくる。歌手になるまでは気付くことのなかったわずかな環境音だ。野宮とエンジニアの会話も、そのときになってじかに伝わってくるようになる。

「もう六時をまわったし。終わりにしましょうか」

「今までのデータはどうします？ 一応残っていますが」

野宮の目が一度、小夏に向けられた。視線がからみ、小さな間のあとに彼女は首を振った。

「本人も納得がいつていないようなので、消しておいてください」

「わかりましたー」

間延びした声が了承する。わたしはなににも言っていないのに、と恨めしげに小夏はパソコンの画面を見やった。そんな彼女の心中に気付くふうもなく、画面の中の歌唱データはまたたく間に消去されていった。エンジニアは回転式の椅子をくりと反転させて問う。

「次はいつにします？ 学校もまだあるのかな。今までどおり一週間後の土曜ですかね？」

「そこにはまた別のレコーディングがあるので……それが終わるまでは、この曲は延期ですね」

今日で終わらせるはずだったのに。言外に苛まれているような気がしてくる。

しかしそのニュアンスに傷心するより先に、小夏の頭には疑問符が浮かんだ。

（いまのって）

ぱっと野宮の顔を見上げる。

別のレコーディングがあるだな

んで、そんな話は一言も聞いていない。

「野宮さん、今の、どういう」

「あら、言ってなかったかしら？ 同じ事務所の相手からコラボ楽曲の申し入れが来ててね、それを受けたの」

「だれと」

「誰だと思う？」

「野宮さん！」

「SHEENAさんよ、あの」

し……っ、とすつとんきょうな声をあげてしまつて、口元をおさえる。

“あの”。そんな一言が添えられるほどに、今となつては有名な名前だった。音楽界に現れた彗星、低迷しかけたこの世界に差した光芒。雑誌や新聞を見れば称賛の嵐で、今世紀最高の歌手だと噂されることもしばしば。

そしてその名は、小夏がいちばん聞きたくないものでもあった。

しいな、シーナ、SHEENA。半年前のシングルCDランキングで、自分の上にその名前を見つけてしまったそのときから不調続きだ。なにを歌つてもいまいち納得がいかない、売り出した楽曲はどれもこれもSHEENAのそれにはかなわない。

世代の女子高校生歌手、兩宮小夏の名は、いつのまにか人々の頭から消え去っていた。

そんな相手からコラボレーションの申し入れだ。自分の意思が通るのなら四の五の言わずに却下しているところだけれど、あいにく立場が弱いのはこちらのほう。なにか言おうものなら子どもの文句だと取られてたしなめられるのが関の山だ。それがわかっているくせに、ただで認められるほど大人にはなれなかった。

「それじゃあ、SHEENAの顔は」

「SHEENA、さん」

「……SHEENAさんの、顔は見られるんですか？」

小夏の言葉を受けて、エンジニアが手を叩いた。

「そりゃあいい！ レコーディングの際にはぜひうちのスタジオを。覆面歌手のご尊顔がおがめるのであれば、料金の方も安く……」
「いいえ、S H E E N Aさんのレコーディングスタジオはもう決まっているそうなので。小夏ちゃんとは別の日に録るから、お会いすることはないわ」

小夏とエンジニアがふたりで肩を落とす。

S H E E N Aの人気を手伝っているのが、いつそ厳格なまでの機密性だ。顔はおろか、性別も年齢も秘密とされている。歌声には男声と女声の両方を使い分け、さらに楽曲のそれぞれが異なった声色を持つ。もちろん顔だしのテレビ出演はすべて断り、ラジオなど肉声が入るメディアにすらも現れない。

いつかS H E E N Aは二人組ユニットなのではないかと噂されたこともあったが、事務所側は断じてひとりだと主張を続けた。その確証はどこにもないにも関わらず。七色の声を持つ覆面歌手として売り出されたS H E E N Aは、確かな歌唱力も相まって老若男女を問わず急速に支持されていった。

その波の広がりには、小夏の機嫌を損なうには十分すぎるほどで。

「それじゃあ、ご挨拶にうかがうぐらいは」

「小夏ちゃん」

「だめ、ですか」

深くうなずかれ、小夏は口をへ字に曲げる。 気に入らない。

クラブの相手にも顔を見せないなんて。

「初めての共同制作の相手に選ばれたらしいから、ね？」

野宮の声に、かすかに苛立ちが混じった。聞きわけがないと思われるに違いない。ぶんむくれた顔で分かりましたとだけ答えて、そっぽを向いた。険悪になりかけた空気を感じ、エンジニアが頬をかく。

「今日はおしまいですかね？」

「ええ、ありがとうございます」

彼がさっさと道具を片付けて立ちあがると、多大な負荷がかけら

れていたことを示すように椅子がきしんだ音をたてた。

ひとこと、ふたこと、マネージャーとエンジニアの間に言葉が交わされる。それらは小夏の耳にはまったく入ってこない。どうにもいたたまれなくなった。

「……おつかれさまでした！」

通学用の鞆を手につけて、頭を下げあう二人の間をすり抜けた。弾かれたように部屋を出る。小夏ちゃん、と名前を呼ぶ声も聞かぬふりをして、走る一歩手前の早足で廊下を抜けていく。ごめんなさい、ごめんなさい、次はもっと上手に歌うから。そう心の中で叫びながら。

途中途中でかかるねぎらいの声にも答えずにいると、ますます自分がみじめになっていくようで胸がつまった。自分の足元の影だけをにらみつける。勇み足で歩きたびに硬い足音がスタジオに響いて、職員たちがなにごとかと小夏をふり返った。

なんて、弱い。

歌が大好きで、ずっと歌っていたくて、その願いを叶えるために歌手になったというのに。人気なんか出なくてもかまわない、自分の歌を聞いてくれる人たちに届けばいい。そう思っていたはずが、今ではその歌でさえ嫌いになりかけている。

歌が好きなのか、それとも歌手という立場が好きなのか。即答できる自分でいられなくなっていた。

泣きたいやら情けないやら。プロなのだから、これぐらいのことではいちいち心を乱されてはいけないというのに。

（腹が立つ、ったら！）

いらだち紛れに思いきり建物の扉を開くと、がっんと振動が伝わってきた。なにかにぶつけてしまったのか。ときどきしながら扉の向こうをのぞいた小夏の顔から、さっと血の気が引いた。

相手は人だ。それも男の子。

自分と同じか少し下ぐらいの年にみえるが、制服を着ていないため学生なのかすらわからない。運動など知らないような白い肌に、

男子にしては細い骨格。無言で頭を押さえてしゃがんでいるのは、扉から入ろうとしたまさにその瞬間に、小夏がそれを押しひらいてしまったからかもしれない。

「ごめんなさい、……だいじょうぶ？」

あわてて小さな隙間から外へ出て、彼の隣にかがみこんだ。う、とうめいた声は、外見にたがわず中性的でやわらかい響きを持っている。すこしだけ鼻声ではあるものの、そこに不快感はなかった。

「だい、じょうぶ……です、すいませ、」

そんな声が、口の中でくぐもる。むしろそれは小夏の心配をあおった。大きなたんこぶができているかもしれない、手当ては必要だろうか。

小夏の心配をよそに彼はぱちぱちと数回まばたきを繰り返して、やっと彼女を見あげる。身長は低いみたい、と、おぼろにそう思っている目があった。彼はけげんそうに眉を寄せたりのばしたりしたあとに、はっと息をのんだ。

「あまみや、こなつ」

そう呼び捨てにされたことを、喜んでもいいものだろうか。

マネージャーの弟くん

瀬尾小夏。それが小夏の本名だ。芸名である“雨宮小夏”も名前の字面はまったく変えていないだけに、見ず知らずの相手に面と向かって呼び捨てにされると言葉につまってしまふ。最近ではマネージャーと会話をすることが多いので“ちゃん”付けに慣れてしまっていたけれど、久しぶりに呼ばれた歌手としての名前には背筋が伸びた。

「ごめんなさい」

言うことに困って、とりあえずもう一度だけ謝っておく。すると相手は小刻みに首を振った。

「こつち、こそ。すいません、邪魔なところに立ってて」

「悪いのはわたし」

怒ったつもりはないのだけれど、彼はしゅんと肩を落としてしまふ。声がかきつくなってしまうただろうか。くせのようなもので、なかなか抜けないので困っている。

優しく、優しく。自分に言いかせて胸をおさえた。立ちあがると、彼も一呼吸おくれて腰をあげる。

「ええと、……スタジオに用があるの？」

歌手としてデビューを果たしていないような一般人でも、代金さえ払えばスタジオハウスを使うのは自由だ。ギターやドラムなどの楽器を貸し出しているところが多く、追加料金でミキシング 音量や音質を調節して組み合わせる作業を頼むこともできる。

とはいっても、たった今小夏が使っていたのはぴんからきりまであるスタジオの中でも高額で、質の高い録音を目指すためのものだ。その料金も、いち学生がぼんと払えるような金額ではない。

だからこそ尋ねただけけれど、彼はきょんとしたあとに、いや、と否定する。

「いま、スタジオに姉ちゃ……姉がいて。知ってる ますか」

「敬語じゃなくていいから。続けて」

すると彼は視線をさまよわせ、やがて小夏のそれとぶつかるためらいがちに喋りだした。

「姉ちゃん、歌手のマネージャーで。S H E E N A って知ってるかな」

嘘をつかないで、と即答することだけはかろうじて踏みとどまった。その代わりに露骨に顔をしかめてしまつて、これでは突っぱねるのとどちらがよかったのか分からない。彼は小夏のその表情にいささか驚いた様子をみせたものの、自分の言葉を取りつくるうことはしなかった。そろそろと彼女をうかがう。

「色々なところをまわつて、次の曲のスタジオを決めているらしくて……あ、そうだ。小夏さん」

小夏と目を合わせ、ほほえむ。

「コラボを受けてくれて嬉しい。ってS H E E N A が言つてたつて……言つてた、みたい」

声はほとんど尻すぼみになっていったうえ、言い方は遠回しにもほどがある。しかしその言葉の中身に、小夏は目をまるくした。それを受けることになった本人でさえ、今日になつてはじめて聞かされた話だというのに。

一般人ではまず耳にできるような情報ではないはずだ。それこそ、S H E E N A か小夏の関係者でもなければ。

「ほ、ほんとうに？」

「嘘じゃない。嬉しいって」

こういうときだけはまっすぐに人の目を見るらしい。

「そっちじゃなくて、お姉さんのこと。S H E E N A のマネージャーって本当なの」

そう問いかけると、やっぱり信じられないか、と彼はななめ下を向いた。

小夏はしばらく彼をながめたすえ、ひっそりとため息をついた。どうしても嘘をついているようには思えない。それでも業界人なの

だから、初対面の相手をよく観察する目は持っていると思自負している。

信じてみようかという気持ちが働いた。わざわざ小夏を騙すためにだけにここまで来たとは思えにくいし。

（それに、もし本当なら）

これはチャンスだ。

本人と直接会うには至らなくとも、自分の言葉だけでも伝えられればそれでいい。うまくいけば、その正体をつかむことも夢ではないだろうし。

嘘だったとしても、だまされたと悔しがるだけでいいのなら。小夏はうなずいて、彼の言葉を待たずに口をひらいた。

「S H E E N Aに会うことはあるの？」

もちろん彼自身には期待はしていない。要するに、彼からS H E E N Aのマネージャーに、さらに本人へと伝わればじゅうぶんなのだ。そう考えていたけれど、予想に反して彼は遠慮がちにうなずいた。

「あ、でも、会わせることはできないから……」

「いいわ、そんなの！」

小夏の声に興奮が混じる。

これでS H E E N Aへとつながるパイプができた。百パーセント信じているとはいえないまでも、かけてみる価値はある。

小夏は早まる鼓動をおさえるように、ひとつ呼吸を置いた。

「S H E E N Aに言いたいことがあるから、それを伝えて欲しいの」

「……内容にもよるけど、おれでよければ」

長いのもちよつと、と目をそらした彼に、小夏は唇の端をつり上げて挑戦的に笑った。彼の向こうにいる、形の定まらないS H E E N Aの影を見すえて。

「ひとつだけよ。 “あんたには絶対に負けない” って」

彼は目に見えてうるたえる。

「え…… S H E E N Aが、なにかしたの？」

「特になにも。ただ気に入らないの、悔しいのよ」

なにもかも奪っていつて、平然とあの位置に立っているその歌手がうらめしい。そこはわたしのものだったと叫ぶことなどかなわず、せめてどんな奴なのかと顔を見ることさえも許されないでいる。：なにか覆面歌手だ、なにか七色の声だ。なんでもかんでも秘密にしておいて、誓ってひとりだから信じてくれとは虫がいいにもほどがある。

もちろんそれをぐちぐちと吐き捨てるのは自分のプライドに反していた。小夏は肩をすくめる。

「それにわたしが不調だから。自分にはっぱかけたいの」

「不調？」

「歌っても満足できないっていうか、ね……そういうときがあるの、歌手って」

わたしはこれがはじめてだけど。胸の奥でそうつけ足した。

「あんたが気にすることじゃないわ、ええと……弟くん」

呼びかたに迷ったすえにそう呼ぶと、案の定彼は眉間にしわをよせる。

「和樹って、名前が」

「はいはい。覚えとくわ、弟くん」

「……聞いてないし」

いいところに収まってしまったのだから仕方がない。初対面の相手を名前で呼ぶのは腰が引けるというのも事実だ。

和樹がむすつとしていた前で、鞆に取りつけている時計で時間を確認した。夏が近づいているために、今日の日の長さはあてにならない。七時半までに家に帰れないのであれば連絡を入れるときつく言われているが、これから急げば間に合いそうだ。彼の横を通り抜けてふり返る。

「じゃあわたしはこれで。伝言よろしくね。あとは頭、ごめんなさい」

「あつ、返事はいつ伝えれば」

返事が返ってくるのが当たり前だと言わんばかりのせりふに、思わず吹きだしてしまう。和樹はなにを笑われたのかわからないようだけれど、それを説明するつもりは毛頭なかった。

一方的な伝言に、わざわざ返事を返すような律儀な人間。S H E E N Aはどうやら、そんな相手らしい。

さて次に会うのは、と考えて千夏はそらを見た。うすい水色の空に、紫のグラデーションがかかっている。この水色が完全な藍色に染まるまでには、まだ時間がかかりそうだ。

（事務所に呼ぶわけにもいかないし）

S H E E N Aのマネージャーの弟であれば事務所の場所ぐらい知っているだろうが、直接的な関係があるわけではない小夏が彼と待ち合わせをするのではよからぬ噂がたつおそれがある。そもそも事務所は歌手、ひいては業界人の仕事の場なのだから個人的な要件は持ちこみたくない。野宮に関係を疑われるのも癪だ。

「来週の金曜日、六時。またここでどう？ 学校の帰りに寄るから」
通っている私立の高校は近くにある。部活には入っていないため、長く待たせることはないだろう。和樹がはつきりとうなずくのを確認して、小夏は今度こそ彼に背を向けた。

日が沈みはじめ、足元の影は遠くまで伸びている。まるでマイクのようにだと頭のすみで考えて、苦笑した。どうしても歌からは離れられないみたいだ。嫌いになりかけても、歌がこちらを向いてくれなくても、結局は同じところに戻ってきてしまう。

（戻れるのかな）

歌手になったときのように、歌うことを心から楽しめた日々に、不安に負けてしまいそうになって首を振った。

「だいじょうぶ」

そうつぶやいて暗示をかける。まだ歌える。好きでいられるかぎり、嫌いにならないかぎり。

わたしはまだ、雨宮小夏でいたい。

風は熱気をはらんで

高校生歌手という肩書きは、嘘いつわりではない。

はじめて歌手を志したのが三年前、小夏が中学三年生に上がったころのことだ。もちろん厳しい両親には猛反発をくらい、もうすぐ受験なのだからと諭された。

もちろん、小夏はそこで諦めることなど選ばなかった。ふたりを納得させるためにと必死で考え、都内でも名のある私立高校に合格することを条件にオーディションに出場することを申し出た。そのころの小夏の学力は中の下がいいところであり、絵空事と思ったのだろう、親も了承した。うちの娘はなにを考えているのかとふたりが話しているのを、陰で耳にしたこともある。

小夏の負けん気は、しかし、そこで力を発揮した。

ぐんぐんと模試の結果がよくなっていくのを見た親が後悔し始めてもう遅い。持てる時間と体力をすべてそこにすぎ込んだ小夏は、するりと難関私立校の門をくぐってしまった。それどころか、大賞など届くわけがないと思われていた彼女はオーディションで審査員に太鼓判を押され、業界に送りこまれることになる。まさに執念がもたらしたデビューだった。

もちろん現役高校生でもあるのだから、勉強を欠かすことなどしない。一度知ってしまった成績上位者の優越感、彼女にそれを手放すことを許さなかった。家庭での自習と歌手としての仕事で、千夏の休日はまたたく間に浪費されていく。

(……それを選んだのはわたしだから)

後悔をする気はさらさらない。けれど、放課後をスポーツや芸術、自分の思うように使っている同級生たちを見ると、うらやましさがいじんでくるのは否めない。三年生ともなれば受験も間近だ。高校生としての最後の時間を充実したものにしたいと思うのは、小夏とて同じことだ。

すっかり誰もいなくなってしまった教室で、黒板に向かって小夏はひとりたたずむ。今年の文化祭の出し物を決めていたのがついさっきの話だ。演劇、漫才、いくつか出された案の中に、歌にかかわるものはなにひとつない。

ひととき勉強に秀でた人間が集まった学校の中であっても、小夏はイロモノだ。クラス外の生徒から突然サインを頼まれたときも、特別扱いはできないからと丁重に断った。けれど、クラスメイトたちがそうした行動をしたことはただの一度もない。

遠慮をされているのはわかっていた。とはいっても、敬遠されているわけではない。性格ゆえにリーダーにまつりあげられることは多かったし、生徒の仲間のうちに入ることもできる。けれど歌手として小夏を“使う”ことを、誰も意見としてあげようとはしなかった。

（優しいのよね）

小夏は結論づける。

ここは高校生としての居場所。歌手としての小夏を心から応援する人間がいても、それを取り上げて利用しようとする人間はいない。真綿に守られたように、くすぐったいけれど大切な、彼女の居場所だ。

小夏は、あ、と声をあげた。時計を見れば、もう約束の時間まで三十分を切っている。伝言を頼んだのはこちら側なのだから、せめて時間に遅れないようにしなければ。

私立高校既定の鞆を肩にかける。制服の指定のないこの高校では、その鞆だけが生徒の証だ。

いたるところから届いてくる女子生徒の笑い声を右から左へ聞き流して、小夏は廊下を歩いていった。

できるだけ早足でスタジオの前まで来たつもりだけれど、和樹はその前で平然と待っていた。ブロック塀に寄りかかったまま携帯音楽プレイヤーで音楽を聞いていたが、小夏を目にとめると電源を切

ってイヤホンを外した。

パーカーを着ているせいか、前回より雰囲気が幼い。あの日の翌日には事務所のなかをあちこち見回してみたけれど、どうしても彼と似た容貌の女性は見当たらなかった。誰もがてきぱきと仕事をこなすような女の人たちばかりだから、どこかどんくさい印象のある彼とはつり合わないのかもしれない。

相手に気付かれないように腕時計を見た。まだ六時までには十分を残している。音楽を聴いていたということは、ずっと前から待っていたのだろう。悪いことをしたかな、と小夏は唇をかんた。

「いつからいたの？」

「そんなに待つてないよ」

ずれた答えを返されたけれど、言わんとしていることは同じだ。

カップルが待ち合わせでもしているかのようなかけ合いをしていたことにむずがゆくなつて、小夏はさつさと話をそらすことにする。

「それで……S H E E N Aには会えた？」

「ああ、会えたよ」

和樹はほころぶように笑う。

「“雨宮小夏さんと一緒に歌えて嬉しい”って」

「……は？」

「だから、雨宮小夏さんと」

「あーもういい！ 聞こえてるから！」

二度も同じことを言われてたまるかと、小夏は首を振ってさえぎる。その言葉にもう続きがないことは、目をぱちくりさせた和樹の様子を見ても明らかだ。

敵対心をむき出しにした小夏に対し、泰然とした態度で返してきた。まるで軽くあしらわれたようで、小夏は憤慨する。

「なによ、なあにが“嬉しい”よ！ 見てなさい、S H E E N Aが腰を抜かすぐらいの歌を……」

ほんとうに歌える？

言葉に詰まった。歌って、と繰り返しても、その先が続かない。

金づちで殴られたように、勢いがかき消えていく。急激に冷えていく頭の中で、自分に問いかけてしまった。今の自分に 自身の歌すらもまともに歌えない今の自分に、ほんとうにS H E E N Aを超えるほどの歌を歌えるのか、と。

不安になり始めてしまえばもうだめで、疑い始めれば止まらない。

「小夏さん」と名を呼んだ和樹に顔を向ける。

痛々しいものでも見るかのような視線とぶつかって、今の自分はそんな表情をしているのかと遅れて理解した。理解はしたけれど、自信にあふれた笑顔などもう取り戻せはしなかった。

「わたしは」

歌えると。歌えると言え。

なかば脅迫概念のように凝り固まった、小夏の中の黒々としたなにかが声をあげる。ここで負けてしまえば、今まで強く保っていた自分が崩れていってしまうから。だから歌えると、言わなければ。言わなければいけない。和樹の目をしかと見つめる。そのくせ、彼の瞳の中に映る自分は、ひどく頼りなさげだった。

ねえ。

胸の奥に忍びよる、低い声に思考が止まる。それは紛れもなく彼の声のはずなのに、確証が持てない。別人のような声に戸惑う小夏に向けて、和樹はかすかな笑みを浮かべている。

「小夏さん、歌うことは楽しくなくなっただ？」

そんなことはない、と答えることはできなかった。

大好きだと、胸を張ることもできなかった。

それが今の小夏をありありと示している。自身が、迷ってしまった。

「昔のほうが楽しそうだった。気持よさそうだったよ」

「……なんで」

「ずっと雨宮小夏のファンやってればわかる。好きだから」

撃ち抜かれたような心地がした。

自分の歌を、雨宮小夏を、はじめて好きだと言ってくれたのは誰

だったろう？ たった一枚のファンレターが、涙が出るほど嬉しかったのはいつだったろう。それが遠い昔のことのように思えて、二年と少しの歳月はそんなにも長かったのかと錯覚してしまう。

好かれるために歌を歌っていたわけじゃない。ただ誰かに、自分の歌を聴いてほしかった。歌っていられれば幸せで、それに耳を傾けてくれる相手がいればそれで十分だった。

（どうして気づかなかったの）

いまでも歌い続けていられるのは、雨宮小夏を愛してくれる人がいるからだ。自分自身が見失いかけた彼女の歌すらも、聴き続けてくれる誰かがたしかに存在するからだ。そして彼ら、彼女らには決して嘘をつけない。違和感をごまかして無理やりに音源に詰め込んだ歌は、こうして簡単に見破られてしまう。

（はずかしい）

自分を嫌いになることは、ファンを裏切ることだ。歌手は、表現者は、誰よりも傲慢でなくてはならないのに。自分の歌に誇りを持って歌い続けるからこそ、プロとしての役目だというのに。

「なによ、」

弱々しい声が出た。そのとたんに、まずい、と和樹が顔色を変える。他人 それも女性に対しては強く出られない少年なのだということは容易に想像できて、そんな彼の言葉で心が震えるほど嬉しくなったことが悔しくて、小夏はもう一度「なによ」とつぶやいた。「あんだ、S H E E N Aのマネージャーの弟くんじゃない。わたしなんか商売敵じゃない」

「個人の趣味は関係ないと思います」

そう言っ てななめ下を向く。

「そんなもんなの？」

「そんなもんです」

「……ありがとう」

「どういたしまして、……え」

どうして礼を言われたのか、とばかりに和樹はぽかんと口を開け

た。

その間のぬけた顔を見てみると、ほんとうは悩みごとなど何こともなかったかのように思えてきた。ただ、今まで見えていたものが見えなくなってしまうていただけ。それだけだった。迷走していたことすら、馬鹿馬鹿しく思える。

穏やかに息を吸いこんだ。

「S H E E N Aにもうひとつ、伝えてもらってもいい？」

「ケンカはちよつと……」

「もう違うわよ」

唇をとがらせるが、先にケンカをふっかけたのはこちらの方だ。

小夏はわざとらしくせき払いをして、それから声をやわらげないようにと気を遣う。

「“こちらこそ”って。あと、“手を抜いたら承知しないから”って伝えておいて」

「どうしてそんなにきついかなあ」

「ずいぶん丸いでしょうが！」

言葉がつっけんどんなことは否定しない。やはりうつうつと恨んでいた相手なのだから、そう簡単に好きになることは難しそうだ。その恨みの大半が八つ当たりであることには、今やっと気付いたばかりだけれど。

ふわり。

小夏の髪をゆらして吹き抜けた風には、とうに熱気が混じっていた。梅雨の時期から夏へと、それは早くも移り変わるうとしている。湿気はいよいよ消えていき、太陽はやがて高くにのぼるようになるだろう。ぽっかりと浮かんだ入道雲から、陽炎を洗い流すような大粒の雨が落ちる季節が、もう少しでやってくる。

雨宮小夏の名が生まれた、その季節が。

もうひとりの自分

息が上がった。

アップダウンの激しい曲調は、はりのある高音を持つ彼女の得意とするところだ。とはいえ、歌い終えた瞬間の体中の力が奪われるかのような虚脱感は、他の曲を圧倒してあまりある。

メロディに歌声を乗せれば、それは高圧的な音となってふりそぐ。スタジオの中に満ち満ちた音楽は余さずひとところに収束し、そうして世界でただひとつの歌へと変わる。そんなふうに作り上げられていく曲が、歌が、大好きだ。けれど。

（疾走感あふれるギターチューン？ 大嘘にもほどがあるわよ）

こちらを試してきているとしか思えない。小夏の本領を発揮できるような曲調の難易度を執拗なまでにあげて、これぐらいなら歌えるでしょう、とでも問いかけてくるような。自尊心が邪魔してSH EENAの歌を聞いたことはないけれど、こんな歌ばかりを歌いこなしているのなら歌唱力うんぬんの前にまず嫌味だ。

負けるものと力をふりしぼった。結局のところ彼女を突き動かしているのは歌うことへの愛と、誰よりも強い負けん気だ。酸欠になるのではないかと心配になったのはデータを見たときだけで、歌うそのさなかはずべての懸念を捨て去った。

その結果がこれだ。深呼吸をくりかえして、なんとか普段の呼吸をとりもどす。

『はい、おしまい。お疲れさま！』

ヘッドフォン越しに、野宮の声が聞こえてくる。その声色はいつになく温かく、小夏はきよんとして窓の外に目を向けた。最初に目があった女性のエンジニアはふんわりとほほ笑み、うんうんとなずいている。困ってしまったて、野宮と同じようにマイクに向かって声をかけた。

「あの、今ので……」

『オツケーよ、よかったわ』

何か月ぶりに聞いた台詞だろう。目がくらむような高揚感を身の内にこらえると、じわじわと口のはしがつりあがって三日月を形どる。ありがとうございますと頭を下げ、小夏は小走りでスタジオの扉を開いた。

「一週間でなにがあつたの？　びっくりしたわ」

「わたしも、よくわからなくて」

半分は嘘、けれど半分は本当だ。

和樹と言葉を交わしたことが関わっているのだとは思うが、歌いかたを指摘されたわけでもアドバイスを受けたわけでもない。むしろそんなことをされようものなら、反発して逆の方向をいくのが小夏だ。

雨宮小夏のファンだと言ったあの少年と会ったのが二日前の金曜日。前回のレコーディングが一週間前。ターニングポイントは確かにそこだった、しかし彼の言葉に、小夏の歌声までも変える力があるものだろうか。

「デビューしたての頃みたいだけど、もっとうまくなった。……うん、すごくいいと思うわ」

「あ、ありがとうございます！」

腰を折って、大きく頭を下げた。胸がどきどきしている。野宮にここまでほめられたのも久しぶりで、飛びあがって喜びたい気持ちを必死で抑えていた。よかったですよ、と同様に言ったエンジンニアは眼前の機械をいくつか操作して、マイクの電源を落とした。

「まだ録りますか？　わたしはこれで十分だと思いますよ」

「そうですね……どうしましょう、小夏ちゃんは？」

「え、っと」

実のところ、歌うのに集中しすぎて、技術のことなどまったく気にしていなかった。ここでビブラトをかけよう、ここで張りあげようと、音楽活動が続けるにしたがって気をつかうようになったこともすべて忘れていた。けれど、もう一度録り直して、果たしてあ

の歌が歌えるだろうか。

気をきかせたエンジニアが、先の音源を流し始める。それをサビの途中まで聴いたところで、小夏は首をふった。

「わたし、これでいきたいです」

「そうね」

野宮もうなづく。

確かにささいな粗はある。しかし、小手先の技術に目を奪われれば失われてしまうようななにかが、その歌にはあるように思えた。誤った選択ではないはずだともう一度、自分を納得させるためにもうなずき返す。

あとはこの音源をS H E E N Aのほうへ渡して、既定の場所にメインとなる歌とコーラスを入れてもらうのを待つだけだ。先にコーラスを録り終えているから、小夏の分担する歌唱部分はここで終わりになる。

理解がいったとたんに力が抜けて、張りつめていた緊張がとけていった。

「野宮さん、あの、迷惑をおかけしました」

野宮が、眼鏡の奥の目をこころなしか見開く。

「わたし、ずっとうまく歌えなくて。歌手として駄目でした。メンタル弱かったって」

「あら、いいのよ」

けろりと返される。野宮は目をほそめた。そうして笑うと、もともとりあがった目のせいか猫のような顔になる。

「誰にだって調子が出ないときがあるもの。そういうときは待つのが私たちマネージャーの役目。歌うことをやめないでさえくれたら、それだけでいいの」軽い調子でひらひらと手をふってから、エンジニアに向かって「それじゃあ今日はこれで。ありがとうございました」と一礼する。

おつかれさまでした。エンジニアがゆるやかな動作で頭をさげた。ベーシユを基調としたふんわりしたフレアスカートには、そこかし

こにレースがあしらわれている。森ガールだわ、とは、一目見たときの小夏の影響だ。

野宮に顔をもどすと、机の上に広げていた資料を片付けているところだった。その中にはもちろん小夏のスケジュール表も含まれている。来週にも余裕を持って取られていたレコーディングの予定を、野宮が二重線で消していく。

（……でも歌えないあいだは、あなたがいちばん怖かったです）

そんなことなど冗談でも言えず、帰り支度をはじめた面々の中で、小夏は自分の鞆を肩にかけた。

「へえ、それで？」

興味しんしんといった様子で尋ねた件の少年に、小夏は肩をすくめてみせた。

背の低い樹の植えられた垣根ごしに、車が低いうなり声をあげて走っていくのが見える。入り口とは正反対にあるために、スタジオの裏側には日の光は届きにくい。

公園にあるような鉄製のベンチがひとつ、用途を忘れてしまったように置いてあったのは幸運だった。そこに二人は並んで座っている。

小夏は今日の日付を確認するように空を見て、指を折った。

「S H E E N Aの音源があがって、CDになったのが一週間前ですよ」

「うん、買った」

「そ、そう。それで わたしは発売のちょっと前に聴かせてもらったの」

かなわないはずだ、と思い知った。

S H E E N Aが主旋律を取るパートはもちろんだが、引き込まれたのはむしろ、それが副旋律に回ったとき。小夏が前に出ていく部分だ。

荒削りだったのは自分でも分かっている。自由に歌えば、どうし

ようもないあどけなさが出る。その歌声に厚みを増しているのがS H E E N Aの担当するコーラスで、言うまでもなく既定の区分の完成度は高い。だがS H E E N Aは、割り振られたパートを歌うだけにはとどまらなかった。耳をすまさなければわからないほどかすかに高音に混じったその声が、小夏の歌声のよさを消すことなく昇華させる。

あれだけのことをされれば十分だ。あちらは小夏の歌をこれでもかというほどに聴いている。どこが足りないか、どこが魅力になっているのか、すべて理解したうえで重ねてきた。

いわば尊重と補完の歌。S H E E N Aを慮ることもなくパスをした小夏とは、目指すものからなにか違う。

「負けたって思ったわ、悔しいけど」

その悔しさは、けれど、恨みには変わらない。

小夏への悔りなど、はじめからなかった。そんなことは、ひとつフレーズを耳にすれば伝わってくる。あれはひとりの歌手として、ひとりの歌手に向き合った結果だ。

「文句はないの。出ないのよ」

「そっか」

和樹がほつとした様子で目をそらした。

これといって待ち合わせをしていたわけではなかった。打ち合わせを終えて事務所を出たところで、また彼とはちあわせしたのだ。初めは驚いたものの、よくよく考えてみれば彼の姉はその事務所に勤めているのだからおかしいことではない。

どうだった、と問われたのがついさっき。事務所の裏に回って人目を避けるようにしているのが今、だ。

黒いズボンにワイシャツ、その下にTシャツといういでたちは、学校の帰りだからか。校章もなにも入っていないからどの学校かまでの判別はできないけれど、高校生であることはわかる。中学生ではないだろう。年のころは同じだ。

デビュー当時は、自分よりも年上のファンが大多数だった。それ

が今ではどうだ。数の上ではもちろん年上が半数を超えるだろうが、同年代、さらには年下の学生たちまでもが小夏を応援している。

(……ひとりのファンコールでやる気が出るなんて、簡単なものね) 認められたかったのだろうか。

ふと思っただのは、大人の中でぽつりと歌う孤独からかもしれない。

「そう、あんたにもお礼を言わなきゃ」

「え？　なんで」

「ありがとう」

「どういたしまして？　……あの、なにが」

わけも分からずといった具合で返す和樹は、もう小夏に対してどうもことがない。小夏もまた、クラスの男子と言葉を交わすときのように、思わず一歩引いてしまう感覚は彼に対しては抱かなかった。どうやら仕事に関わってくるとその感覚も麻痺するらしい。雨宮小夏として接するからだろうか。

そう考え至った瞬間、笑いだしてしまいそうになる。こうして当然のように会話を交わしておきながら、自分の本名は明かしていないのだ。

「瀬尾小夏、っていうの」

「せお……？」

「わたしの名前。雨宮は芸名だから」

瀬尾小夏の友人は、雨宮小夏を見ようとはしない。雨宮小夏を売り出す事務所の人々は、瀬尾小夏の生き方には目もくれない。別のもんとして切り離された二人の自分の両方を、どちらも小夏だからと受け入れられたためしはなかった。それでもいい、と思っている。これを繋ぎとめるのは自分で、自分だけがそれをわかっていればいいのだから。

けれど、名前を伝えるくらいはいいだろう。隠しているわけではない。調べれば、ネットの片端くらいには存在しているだろう名だ。

「瀬尾小夏、さん」

「あんたの名前は？　弟くん」

そう問うた瞬間、顔をしかめられる。やっぱり覚えてない、とぼそりと言われて慌てた。

「あ、だから、フルネームよ！ 名字まで！」

実を言えば名前もあやふやだ。もちろんそれは隠しておく。

小夏の弁明が功を奏したのかは分からないが、ふいに彼はよそを向いた。拗ねているというわけではないらしい。考えこんでいるようなその様子に違和感を覚えた。

「隠さなきゃいけないってこともないでしょ？」

「や、うん……まあいいか……小夏さんだし」

「なによその言いかた」

「馬鹿にしているわけじゃなくて。……うん、いいか」

どうやら彼の中にはなんらかの葛藤があったらしい。いいか、とつぶやいた和樹の顔はなんとなく晴れやかで、暑い日にゆるりと通り抜けた風のような、全力疾走をやり終えた瞬間のような、そんな表情をしていた。

「椎名。椎名和樹です」

しいな。

それを聞いて呼吸が止まった。

「え、え？」

まさか、と心がストップをかける前に、小夏の頭は働いていた。思い当たる節はいくらでもある。

もしもS H E E N Aが小夏のように、本名から芸名を作り出したのだとしたら。芸能界を見ても、そうして芸名を選んだ著名人は数えきれない。

それに、小夏の本心に向かって問いかけてきたとき、まるで別人のように変わった和樹の声色はなんだ。雰囲気や口調というだけの話ではなく、突然他人がそこに現れたのかのように思うほどの変わりようは。

そして、もうひとつ。

（マネージャーの弟だからって、S H E E N Aに直接会うなんてこ

とが、ほんとうにできる？)

考えてみればそうだ。同じ事務所内、さらにはコラボする相手にも徹底的に隠されたS H E E N Aの正体が、マネージャーの弟とはいえ部外者の彼に知らされるはずがない。あまつさえ直接会って言葉を交わすなどということができようか。

(待つて、待ちなさい)

ようやく思考を制御する。考えすぎだ。彼はあくまで、S H E E N Aのマネージャーの弟で。杞憂ならばそれでいい。

あくまでも今のは小夏の想像にすぎないのだと。名字が椎名というだけですぐに関連付けてしまうのは、早計にもほどがあると。

まさかね、と愛想笑いを浮かべて和樹を見つめた小夏に、和樹はにつこり笑って、

「S H E E N Aは、おれです」

容赦なく爆弾を落としていったのだった。

それは誘拐のように

腹の出たあのエンジニアと仕事をしたのは、録音が終わった段階で三回だった。録り終えたときには陰ながらガッツポーズをしたものだ。間延びした声と外見との対比がどうしても苦手で、実績があるとは知っていても、共にいる時間が苦痛だった。

レコーディングを終え、事務所で簡単な打ち合わせをしたあとに、野宮と並んで歩く。夕飯は彼女と食べる予定でいた。歩調も軽快になるというもので、野宮はそれをさして笑う。

「ずいぶん元気ね、そんなにあの人が嫌だった？」

「はい！」

「いいお返事。でも駄目よ、そういうこと言ってちゃ」

性格が合わない相手なんて、ごまんといるんだから。そう肩をすくめられた。仕事には私情を持ちこまないところにはひそかに憧れている。マネージャー業は自分が初めてだと言っていたけれど、この事務所に勤めていた期間はもつと長いはずだ。

多数の歌手と専属のマネージャーを抱えこむこの事務所で、今や売り上げトップの座についているのはS H E E N Aだ。そのマネージャーは彼の姉だという。

あれから質問攻めにしたけれど、和樹はなにひとつ嘘についてはいなかった。彼の姉のマネジメントの対象がS H E E N A、彼自身であつたというだけだ。

椎名美里。その女性が、彼の姉だという。聞いたことのない名ではあつたけれど、そもそも事務所に勤める人の名前をすべて把握しているわけがない。

似てないって言われるけど。そう最後につけ足して、和樹は照れたように笑った。

（そうだ）

小夏は足を止めた。ふり返った野宮を、仰ぐ。

「野宮さん。この事務所に、椎名美里さんって」

「うん？ ああ、椎名先輩ね。いるわよ」

先輩。野宮よりも前から事務所に勤めている女性だ、と記憶にためて、小夏はさらに尋ねる。

「どんな人ですか？」

「どんな人って、そうねえ」

それきり考えこんでしまう。野宮さん、と不安になって名前を呼ぶと、彼女は眉を寄せた。

「ひとことと言っなら」

「あつ、小夏ちゃんだ！」

野宮のものではない声に呼ばれた。ハスキーながらも、女性の伸びを残した声は耳ざわりがいい。しかしそんな声には聞き覚えがなく、怪訝に思ったのも、つかの間。

このあたりにいるだろうと見当をつけた位置に目を向けても、すでにそこには誰もいない。どこにと慌てれば、すぐ横でなにかが動く気配がした。

ほんの数秒で廊下を抜けたのか。驚いても遅い。

「変な人、かしら」

野宮が答えを出した瞬間に、素早くがつつりと腕をつかまれる。

女性のものだとすぐにわかる細くて白い指には、驚くほどの力がこめられていた。ふり払おうという考えが頭に浮かぶよりも前に、その女性はさらに腕を引いていく。抗えず、台風のようなそれにさらわれる。

「野宮、この子借りてくね！」

「はい？ …… って、椎名先輩、待つ」

それ以上は聞きとれなかった。

歩幅が長い女性の早足についていくには、小夏は自然と走らざるを得なくなる。腕をつかんだ手の力はゆるむことなく、引かれるままに事務所の廊下を抜けていく。足音が聞こえないのは、彼女が履いているのがヒールのない靴のためだ。

（ちょ、っと。待つて）

編みこまれた茶髪と、すっきりした立ち姿。暗い色のジーンパンにシャツというシンプルな服装は、背が高くすらりとした体型の彼女によく似合う。野宮があくまでも女性らしさを中心にすえた美人なら、こちらは男性の中に混じっても違和感のないような美人だ。軽やかに、大股で歩いていく姿も様になっている。……いるけれど、これではまるで。

（誘拐っていうんじゃないの……っ！？）

流されて、流されて。

気がつけば小夏は、事務所の外の軽自動車に乘せられていた。

そのまま連れてこられたのは、郊外にあるマンションの一室だ。

走った距離はそう長くはない。むしろ事務所とくらべれば、小夏の家に近づいていた。普段は学校や事務所への移動に電車を利用している小夏だが、このマンションからであれば自宅にも徒歩で帰れるだろう。後部座席から見知った風景が目飛びこんできたときには驚いたが、帰りは楽ができそうだと予想外の幸運に喜ぶことはできなかった。

「……………」

無言のまま受ける、刺さるような視線が痛い。

部屋の中央にある低いテーブルの前に、小夏は腰をおろしていた。相対的に上から向けられるそれから、必死に目をそらす。そこにどんな表情があるかなど容易に想像できた。えてしてその通りだったのだろう、彼の口から最初に出たのはため息だった。

「あのさあ」

「ふ……不可抗力よ」

とうとう耐えきれずに顔をあげてしまう。呆れの一色に染まった目とかちあった。

どうやら学校帰りらしい。前回に出会ったときのようなワイシャツを着ている。着崩すということをしないうで、そのボタンは二

つほどを残してきつちりと留められていた。

荷物が詰まっているためか垂れ下がったショルダーバッグを部屋のすみに置いて、和樹はキッチンへ歩いていく。そのキッチンからは、先ほどから絶えず鍋の湯が沸く音が聞こえてきていた。小夏をここに連れてきた張本人である和樹の姉、美里が夕食の準備をしているらしい。

親御さんに連絡しておいてね、と言われるままに携帯からメールを送ったが、いまだに自分がなぜ連れてこられたのかはわからない。まだまだ。

戻ってきた和樹が、同じ机を囲んで座る。

「どうせ姉ちゃんに連れてこられたんだろうけど。人の話聞かないから」

「どうしてわたし、つれてこられたの」

小声で尋ねると、さあ、と肩をすくめられる。姉弟でも意図がつかめないというのはどういうことか。

和樹の目が、正座をしたままの小夏の足に向けられた。彼は申しわけなさそうに眉を寄せ、自分の足を軽く叩いてみせた。

「あんまり気は遣わなくていいよ。晚饭だけ出したら帰すつもりだろうし」

「気を遣うなってほうが無理でしょ、人の家に来てるんだから」

「しっかりしてるね」

「親の教育よ」

小夏の両親は厳しい人で、一人娘に対してももちろん例外はなかった。それに反感を覚えることこそすれ、理路整然とした両親のいibunはもつともなことで、しぶしぶ従っているうちにそれらは身に染み着いてしまっていた。芸能界で生きていくことが決まった当初には、ずいぶんと役に立ったものだ。

台所の音がいったん止まり、代わって油のはじける音が聞こえてくる。次々と移り変わるその音が手慣れている気配を感じさせて、成人している美里なのだからそれは当然なのかもしれないとは思っ

たけれど、疑問が浮かんた。

（ご両親が見えないのよね）

このマンションの一室に入るや否や、美里はさつさと夕食の調理に入ってしまった。手持ちぶさたになった小夏は、家への連絡をすませたあとは部屋の中を見わたしているしかなかったのだ。きちんと整理された部屋のなかには、なぜか彼らの両親の私物らしきものが見当たらない。

美里が戸惑いもなく料理に移ったこともあわせて、もしやと思った。

「ご両親とは離れて暮らしてるの？」そこであつと思つて、「言いたくないならいいんだけど」とつけ足す。

若くして両親と離れて暮らしているのだから、なにか並々ならぬ理由があるのかもしれない。他人の問題に首をつっこむのも失礼かと、言つてしまつてから後悔した。

和樹は虚を突かれたように、ええと、と言いよんだ。二重の目で数回まばたきをする。どう説明すべきかと考えていたらしい、それから言葉を選ぶようにゆっくりと言つた。

「うちの両親、仕事先が海外だから。日本にいることのほうが少なくて、しかも実家がかなり地方で。ここから……ええと、車で一日かかるぐらいの」

納得がいつて、ああ、と相槌をうつ。

小夏たちの属する事務所の本社は、都心をはずれた辺りにある。

それでも大都会東京には変わりない、地方出身の歌手ならばまず転居を考えるだろう。ただでさえ多忙なのに、移動時間がそれ以上にかかるのではとてもではないが生活していけない。

「それで越してきたつてわけ」

「そう。……ごめん、ちよつと荷物だけ片付けてくる」

うなずいた和樹は立ち上がり、置いたままにしていた自分の荷物を肩にかけた。知らない相手ととり残される小夏の事を気にかけていたのだろつ、香ばしい匂いがただよい始めた台所を見やり、声を

ひそめて言っ。

「変なこと言われてもさ、無視していいから」

「変なこと？」

「聞こえてんのよ、和樹ー！」

突如響いてきた声に、和樹が肩をすくめた。ということはつまり、今までの会話もすべて聞こえていたのだ。

水気をふくんだ布巾を持って部屋に戻ってきた美里が、一度和樹に視線をやってから小夏に笑いかける。机の上を拭く手つきも慣れたものだ。

「小夏ちゃん、もうちょっとだけ待っててね」

「すみません、ご飯なんていただいて」

「いいのいいの。連れてきたのはこっちだし。暇にさせちゃってごめんね、……そうだ」

手を止めて、ある一方を指差した。和樹が入ってきて開かれたままの、横開きの扉の向こうがわだ。いくつか部屋が並んでいるが、指はそのうちの真ん中を示している。

「あれ、その子の部屋だから」

「はい？」

意味が分からず小夏が尋ねかえすのと、和樹が顔色を変えるのが同時だった。美里は少年のような笑みを浮かべてみせる。化粧のきつさのない彼女に、やはりそれはよく似合っている。

「入ってもいいよ、おもしろいものもあるし」

「姉ちゃん！」

「いいじゃない、恥ずかしいものでもなし」

布巾を手に立ち上がって、お好きにどうぞ、とばかりにまたキッチンへ戻っていく。冷蔵庫を開けたのであろう音があとに続いた。まだ調理は続くらしい。

和樹を見上げると、今度は彼のほうが懸命に目をそらしていた。さつきとは真逆になった立場がおかしくて、小夏はなんにも言わずにそのまま彼を見つめ続ける。おもしろいもの、と言った美里の言葉

が気にかかってもいた。

「……そんな、なにも」

しぼりだすような声が出された。それでも目を合わせようとしない和樹の隣で、小夏は立ち上がる。そうしてしまえば、背丈はほとんど同じだ。それでいくらか威勢を取り戻して、小夏はにっと口のはしをつり上げた。

「おもしろいかどうかはわたしが決めるわ」

「……横暴」

ぼそりとつぶやかれ、彼の背を強く叩いた。うめき声のあと、「それに暴力」と続く。

「わかったよ、わかったから」

ななめ下を向いての言葉と、短いため息が漏れた。

和樹が他人に対して強く出られない姿勢は、どうやらあの姉と暮らしているうちに染みついたものらしい。ひとり暮らしの小夏にはわからないが、やはり歳の離れた兄弟には逆らえないものなのだろうか。

肩を落として先を歩く彼の背を見て、小夏はくすりと笑った。

多くの道があるゆえに

小夏が歌手を目指したのはほかでもない、あこがれた歌手がいたからだ。

どんよりとした雨空を貫くような歌声と、少しばかり体調をくずしても笑顔を絶やさない芯の強さ。外見でも歌詞でもなく、その人自身に心を奪われた。同じように歌いたいと思った。

けれど“その人のようにになりたい”は、やがて、“他人に歌を聴いてもらいたい”に変わっていった。歌う喜びにすっかり魅了されて、あこがれの人を模倣することに意味を見出さなくなった。彼女のCDはまだ保管しているけれど、小夏が歌手になってからは聴いていない。

とどのつまりは、いくら誰かのファンだったとはいえ、自身が歌手になれば自分を磨くことに重点を置くようになるのがふつつなのだ。そこそこ人気がつくようになればなおさらのこと。

小夏自身の体験で実感したそれが、しかし、たったいま覆されようとしていた。

「椎名」

呼びなれてしまえばそれはただの名字であり、彼を呼称するにはちようどいい。小夏は目の前のものを信じられない気持ちでながめていたけれど、ようやく口を開いた。

「……ぜんぶ？」

「ぜんぶ、です」

一応。

それぞれを調べる必要もない。部屋の一角をしめている棚には、びっしりとCDがつめられている。そのどれもが自分の歌ったものであることは、カバージャケットを流し見ていけばわかる。ところどころで同じタイトルがふたつ連なるのは、初回限定版と通常版をそれぞれそろえているからか。

CDの列がとだえれば、そのとなりには音楽雑誌がつづく。いくつかを手にとって調べると、表紙や大記事、コラムを問わず、小夏が取材を受けたものや写真を撮った記事が収められている。デビューしたてのころの受け答えは見るにたえず、ひらいた瞬間に雑誌から顔をそむけた。

CDのうちのひとつ、初期の一枚を取り出した。ジャケットのなかで、花束を抱えた二年前の自分が虚空にほえんでいる。

「これなんて、すぐに廃盤になったやつじゃない」

「いつも発売日に買ってるから」

「ぜんぶ？」

「……ぜんぶです」

小夏は棚のCDを取り出しては戻してをくり返す。いくつか質問を発して、そのたびに和樹が身を縮めているのはわかっていても、驚きと感嘆が先に立った。嬉しいも気持ち悪いもない。まず自分のCDがここまでそろっているところを初めて見た。

そのくせ彼がS H E E N Aとして歌ったCDは、空いている棚の端に乱雑に詰めこまれているのだ。小夏が過去、消費するように聴いていったCDでも、あそこまでの扱いは受けていなかった。

「……その、なにも言えないの。ありがとって、言うべきなんだけど」

「もうなにも言わないください」

だから嫌だったのに、とひとりごとを言っている。なんだか申しわけなくなつて、小夏は棚に背を向けた。部屋の扉側で両手を組み合わせている和樹の様子は、まるで、親に怒られたあとの小学生だった。下を向いてむくれた顔をしている。

「嬉しいのは確かなの。ただ、ファンってこういうのが普通なのかって、びっくりして」

再度棚に目を戻そうとすると、和樹が顔を上げた。口調はそのまま、ぼそりと答える。

「ほかの人のことは知らないけど。おれは、買ってます。毎回」

それも発売日に、もしかしたら予約までして。雑誌は特定のを、毎月チェックして買っているのか。歌手として稼げるようになるまでは、自由に使える金額だって少なかっただろうに。

口元をおさえた。あちら、こちら、と視線がさまよう。

「いまの、うれしかったかも」

「……そうですか」

ふう、とひとつ息をついて、和樹はふっきれたらしい。諦めの表情がのぞいている。むくれた顔がものめずらしかったのだけれど、それは心の中にとどめておくことにした。

廊下をわたって、和樹のうしろに美里が立った。女性にしては背の高い彼女と和樹とでは、年齢を差し引いても身長差が大きい。それも二人の関係の原因だろうか、やきたいもないことを考えた。高校生にもなれば男性はぐんと背が伸びるはずが、どうやら和樹はその恩恵を受けなかったらしい。

「すごいでしょう、それ」

驚きましたと答えると、美里は満足げに和樹の頭を叩いた。それを受ける彼は反対に不服そうに顔をそむけている。上下関係はともかくとして、二人の間にこれといった確執のないことは確かだ。

（いいな、兄弟）

和樹にそう言えば、抗議の声が上がるのは目に見えているけれど。

テーブルの中心には透明なボウル、そしてルツコロとモッツアレラチーズのカプレーゼ。ひき肉のたっぷり入ったボロネーゼと、海老や貝類の乗せられたピザが湯気を立てている。香ばしい匂いの正体はこれか、と、小夏は口をぽかんと開けていた。美里は盛り付けにもこだわる性分のように、ピザの具材は均等に並べられ、ボロネーゼには見ばえよくパセリが飾られている。

「美里さん、調理免許とか、そういう」

「持ってないわよー、音楽ひとすじなもの。ほら、食べて食べて」
いただきますと手を合わせて、パスタを口に運んだ。すぐにトマ

トの風味が飛んできて、あとからパルメザンチーズのまろやかさがその酸味を包んでいく。ほう、と声がもれそうになるのをかろうじておさえた。反応を待っているらしい美里を見あげて、ごくりのみ込む。

「おいし……おいしいです、これ！」

「そっか、嬉しいなあ。がんばってみてよかった」

小夏の向かいに美里、二人の隣になる形で和樹が座っている。彼もまた口の中ものを嚥下したあと、氷と麦茶の入ったグラスに手をのばした。

「本当、どうして結婚できないんだろうね。外っ面は完璧なのに」
要は中身、と言外に匂わせたのは、先ほどの意趣返しか。美里はにこやかな笑顔をまったく崩さず、カプレーゼを三人の皿に取り分けた。パプリカが和樹の皿に多めに入ったのは、きっと偶然ではない。

「家にひとり、厄介なのがいるからかしらね」

「なるほど、自分のことか。そうだね」

「気付いていないうちが華って、よく言っただわー」

嫌味の応酬を、ピザをほおびりながら聞いていたが、途中で追うのをあきらめた。少しして和樹が眉を寄せたのを見て、言い負かされたのかとぼんやり思う。年の離れた姉には口でも勝てないようだ。もっともこの場合、相手が悪かったのではと思わなくもない。

とうとう食器のこすれる音だけが響くようになり、ある程度を腹に入れたところで、小夏は再び美里を仰いだ。それまでもずつと見られていたのか、ばちりと目があう。それにややおののきながら、小夏は手のフォークを置いた。

「わたし、どうして連れてこられたんですか？」

本題に入らなければ、このまま夕食だけ出されて返されそうな気がしていた。そうそう、と美里は手を叩いて居ずまいを正す。それだけでぴんと伸びた背筋は、どこか小夏の母親に通じるものがあった。

「ええとね、和樹のことなんだけど。SHENNAの話はしたんだよね」

「はい。あ、もちろん誰にも言いません」

事務所と本人の決めた売り出しの方向性に、もはや嫌悪感など抱いていない。それを補ってあまりある実力と、歌に対する真摯な姿勢があることもよく理解している。

「そう、誰にも言わないで欲しいだけ。それが頼みたかっただけなの、今回は」

一口食べたきりのピザを取り皿において、美里は油のついた手を布巾でぬぐう。拍子抜けした小夏に、目を細めて言った。

「その子ね、デビューしたのが一年前なんだけど、そのときもいろんな声を持ってたの。この曲はこの声で、こんな風に歌えばいいって、わかっているみたいでね。それが全部和樹の可能性で、わたしも社長も知っているんだけど、……でも歌手って、そうじゃないでしょう?」

歌手は表現者だ。

作詞家、作曲家によって作り上げられた枠に自分を注ぎ、時にはあふれださせて、楽曲を構成していくのが歌手の仕事。ひとりひとりには個性という名前のキャパシティがあって、それが限界になったり自身の味になったりと姿を変える。

その個性がなければ、もちろん道は大幅に広がるだろう。あらゆるものに対処し、成功し、容量どおりに枠を満たすことができる。

けれどそれは、自分がないのと同じことだ。歌という自分を表現する方法に、もともと自分がないのでは意味がない。

曲の枠のとおりに歌うのではない。曲を制御し、時には傲慢なまでの自己意識と個性で枠を壊していくのが歌手という職業だ。

「その気になればどの方向も選べるの。だけど、それが見つからないのね。だから社長は、SHENNAを覆面歌手として売りだした。顔も性別も歳も隠して、いつでも好きな道を選べるように」

それはすなわち、自分を見つけられるように。

小夏が選びとってきたのは、好きで好きでたまらなかった歌を歌うための道だ。最初こそあこがれの人を追いかけたものの、自分が歌うことに喜びを見出した瞬間から、それは小夏の道になった。自分にしか歌えない歌を作り続けてきた。ほかの歌手もまた、同じように自分を選びとっていったのだろう。

それができない歌手。進める道が多すぎて、立ち止まってしまったのがS H E E N Aという歌手だ。

美里は残った麦茶を口に流しこみ、ひとつ息をつく。

「だからね、黙っていてあげてほしいの。この子が和樹として歌えるようになるまで、待ってあげて」

「……はい」

居心地の悪さを隠すように、皿に残っていたパスタを口に入れる。味を感じることができなくて、ほとんど嚙まずに飲みこんだ。

美里は小夏と美里の顔をうかがって苦笑した。同じ顔をしてうつむいていたらしい。ちらと壁時計を見やり、明るい声で彼女が言う。

「ごめんね、遅い時間になっちゃった。和樹、小夏ちゃん送ってあげて」

「ん」

和樹がテーブルに手について立ちあがったので、小夏はあわてて首を振った。

「大丈夫です、ひとりで帰れます。家、近いから」

「それでもね、最近は危ないから。……ご飯、もおいしい？」

食器が端から片付けられていくのを前にして、手を合わせて「ごちそうさまでした」と小声で言った。

最後までおいしく食べることができなくてすみません。心の奥でそうつぶやいて。

夏が盛りに近づく夜は、時間帯などなんのそので生ぬるい熱気をただよわせる。マンションを出た瞬間に広がったそれに顔をしかめ

ていると、横からの温かい風が追い打ちをかけた。

「家、どっち？」

「北区のほう。郵便局の近く」

「それじゃ本当に近くだ」

以前は暗かった住宅地も、痴漢さわぎが多くなってからはところどころに街灯が作られるようになった。夏の夜にもなれば小さな虫が光に集まり、8の字を描いては気が狂ったように街頭にぶつかっていくのを目にすることが多い。

歩きだせば、その町並みには見覚えがあった。小学生のころはこの西区を通って通学していたため、このあたりの道を歩くのは懐かしい。高校生になって違う学校に入った彼らは、彼女らは、今はどうしているのだろうか。数人はすでに名前も顔もおぼろげにしか覚えていないが、そんな彼らにとっても、自分は同じように輪郭のうすい存在だったはずだ。

やがて足元を見て歩くようになった小夏を、和樹は一度ふり返った。彼女が反応する間もなく、すぐにまた前を向いてしまう。

「……あのさ、気にしなくていいから」

ひとりごちのようなそれを聞き逃しはしなかった。小夏が顔を上げると、彼の言葉が続く。

「重い話じゃなくて、ただ、黙っていてくれればってだけ。……これはおれが、どうにかすることだし」

もちろん、小夏が口を出してどうこうできる問題ではない。

それが歯がゆい。力になりたいという思いはあるのに、持っているものも選んできた道も決定的に違っていた。個人としてあたりまえの違いが、こんなにももどかしいと思うときが来るなんて。

数歩進んで立ち止まる。鞆から携帯電話を取り出して、数回ボタンを操作した。真っ白なそれは、高校入学と同時に両親に買ってもらったものだ。仕事とプライベートの区切りがしっかり付けられたアドレス帳に、もうひとつ未設定のフォルダを作る。

今度こそふり返った和樹に、その携帯を突きつけた。

言わんとしていることは伝わったのだろう。目をしばたかせた彼の「でも」という戸惑いの声をさえぎる。

「それでも先輩だから。……相談なら、乗るわ」

「小夏さん」

「前にも世話になったし、今日もご飯おいしかったし！ だから、

番号と、アドレス」

メアド、と呼ばなくなったのは、年上にまじって仕事をするようになってからだ。若いねと大人にほほえまれるのが、なんだか気恥ずかしかった。そう思ってアドレスと呼ぶようにすれば、女子高生たちには笑われるのだ。

「ご飯は姉ちゃんの手柄だよ」

和樹は眉尻を下げて、ポケットから引きぬいた青い携帯をひらいた。受信画面を見せたままの小夏に、赤外線でプロフィールが送られてくる。名前と電話番号とメールアドレスだけが書かれた簡素なそのプロフィールを新しいフォルダに登録して、代わりに自分のものを送った。

小夏の携帯に送信終了の文字が表示されると同時に、彼はほおを緩める。

「初めてかも」

「は？」

「女の人」

「……そう」

二つ折りの携帯電話を勢いよく閉じると、もう一度鞆に放りこむ。早足で和樹を追いこして、背を向けたままと言った。

「ここまででいいわ。もうすぐだから。ありがとう」

「だいじょうぶ？」

うしろ向きに投げやりに手をふって、走りだす。あとを追う足音はなかった。

（なんて、ことを）
言っただろう。

いつまでも話していることができそうになくて、逃げ出すように彼から離れていた。言い訳じみた言葉のとおり、家が近かったことだけが、唯一の救いだ。

植木に囲まれた自宅の、その白い壁に手について、荒い呼吸を整える。鍵をあけて家に入ることもせず、その場にしゃがみこんで、膝を抱えた。顔が熱を持っているのは、全力で走ったからか、夏の暑さのせいかな、それとも。

（顔、合わせづら……）

できれば事務所に行く日が重なりませんように。
そう願って、はあと息をついた。

匿名の刃は赤く

夏のおい、というものがある。

たとえばそれは熱しに熱されたアスファルトのおいであつたり、プールの上を通りすぎた風の、つんとくる塩素のおいであつたり。そしてあるいは、汗くさを隠すための制汗剤のおいであつたりする。

小夏にとっての夏もそうして始まるはずだつた。汗と日差しを嫌う女子高生たちのなかで、その一員として、同じように液体の制汗剤を塗りたくつて。

その朝、事務所に来なければ、いつもと同じ夏が訪れていたのかもしれない。

「見ちゃだめ、……小夏ちゃん！」

肩を揺さぶられて視界が揺れる。けれど小夏の目は一点に向けられたまま離れなかった。

人と人のあいだからかうじて見えるのは、壁一面に貼り付けられ、バツ印をつけられた自分の写真。そして、見間違えようもない、雨宮の名前だつた。

『雨宮小夏は最悪の歌手』

映写機が頭の中にあるようだ。鮮烈な赤に彩られた攻撃的な言葉が、脳裏に焼きつけられる。

見てはいけないと小夏をたしなめる誰かの声さえも、はるか遠くで響くだけ。人の海にとらわれて、ささやきと叫びがぐちゃぐちゃに混じり合った波の中で、そのくせ心のなかばかりがしんと静まつて。

『引退しろ』

ひときわたく塗られたその文字から、やけに甘つたるい苺のにおいがした。

事務所の控え室にこもって、騒ぎがおさまるのをじっと待っていた。野宮が手配したのか、昼前だというのにだれもそこには寄りつかない。ひとりで使うには中途半端に広い部屋で、ティーパックで煎れたばかりの紅茶と向きあう。

（なに、あれ）

紙コップの紅茶に映る自分に問いかけても、答えが出るはずもない。琥珀色のそれに口をつけて、まだ早かったかなとしびれる舌を噛んだ。

早朝に事務所を訪れたあたりから、記憶がやけに鮮明に残っている。

事務所の壁に貼りつけられていたのは、大きく赤いバツ印をつけられた小夏の写真だった。印のない数枚には小夏の引退を訴える痛烈な言葉が殴り書きされていて、人の目を集めていたのだ。何重にも上塗りされたバツ印からは、姿の见えない相手からの強烈な敵意が叩きつけられた。

胃の中にたまった、重い空気を吐きだした。結局紅茶を飲む気にはなれずにコップを遠ざける。

（……なにか、したかな）

他人をおとしめるようなことを。あれだけの批判を受けるようなことを、しただろうか。

ファンを裏切ってしまったり、なにげない一言が誰かを傷つけていたり　いくら考えても、空回りするばかりだ。そもそも、つい最近まではこれといったおおよけの場には立っていなかった。前回のライブを行ったのももう四ヶ月も前のことだ。

「なによ……」

理由がわからない。雨宮小夏が、どうしてあれだけ嫌われなければならぬか。

二回、三回、と扉が叩かれたあとに、野宮が部屋に入ってきた。あらかたの処理は済んだようで、扉のむこうの騒ぎはいつの間にかおさまっていた。

「ごめんね、小夏ちゃん」

「いいえ……。だいじょうぶです」

「早めに連絡入れて、今日のお仕事をお休みにすればよかったんだけど」

それは。

（わたしがなにも知らないうちに、なかったことにする、ということ）

歌手たちにストレスなどの負担を与えないようにするのも、マネージャーの仕事だと聞いている。精神状態は歌にそのまま響き、最悪の場合は活動停止に追いこまれることもあるからだ。メンタルケアの苦手な若手の歌手には特にそれが顕著なのだと。

思い知らされる。 守られてきた。

小夏の歌の背後には、周りの大人が固めた足場がある。もしかしたら今までにもこんなことはあつて、ただ小夏が知らないでいただけなのかもしれない。

あの、と呼びかけた。

「誰がやったか、とか……分かるんですか」

「特定まではできそうにないわね。こういうのって、あたりまえだけど匿名だから」

絶対に安全な場所から、攻撃してくる。そうして、自分の傷つけた相手の様子をうかがっているのだ。

「一応、椎名先輩が写真を集めて調べてるわ。筆跡とか、なにか手がかりがないか」

「美里さんが？」

「小夏ちゃんには色々と迷惑をかけたからって」

美里に連れ去られた一件は、いつの間にやら片づけられていたらしい。彼女は事務所の誰もが認める“変な人”であるようで、その一件についても彼女の気まぐれということで処理されていた。

野宮はハンドバッグから手帳を取り出し、スケジュールのうちの一日をボールペンでつついた。来たるライブの日取りが、几帳面な

字でつづられている。

「このライブのことだけど、中止にするしかないわね。どんな妨害をされるかわからないし」

えっ、と声をあげた。

ちようどひと月前から予定されていたライブだ。事務所ではネット上での告知を行わず、あくまでも都内の若者を対象としたものだった。それでもチケットはすでに完売していたはずだ。代金は払い戻すとしても、どれだけの落胆を生むだろう。

「どうにかありませんか？」

「小夏ちゃんの身の安全が一番なのよ、ファンの皆さんには申し訳ないけど」

「でも、野宮さん」

「わたしには、小夏ちゃんを守る責任があるの」

二の句が継げずに、唇を噛む。

そんなことは分かっている、などと、口答えをするほど向こう見ずではない。

「親御さんから小夏ちゃんを預かっている以上、危険にさらすわけにはいかないの。分かっただけだよ」

そう、分かっている。野宮の危惧がすべて小夏の今後のためだということも、今回の騒動がどれだけ緊迫したものであるかも。もしもライブを行って怪我を負うようなことがあれば、犯人の要求するように引退まで追い込まれてしまう可能性もある。

自分の声を、ときには容姿を、売り物にするというのはそういうことだ。

（だからって、こんなの）

はいそうですかと受け入れられるような聞きわけのよさなど、持ち合わせていない。ライブを待ち焦がれ、そのためにスケジュールを調整したファンもいるはずだ。彼らの期待を無視して、自分の身を守るためにライブを中止して、罪悪感が湧かないわけがない。

野宮の言い分もファンの思いも、よく分かる。分かっているから

もどかしい。

そこでもう一度、控え室の扉が叩かれた。二人の返事を待たずに開け放たれたそこから、手ぶらの美里が顔をのぞかせる。

「ごめんね、ちょっといいかな」

「なにかわかりましたか？」

問うた野宮に、美里は肩をすくめてみせる。

「ペンから苺の香りがしたことと、ちょっと女性らしい筆跡だったことぐらいしか。本人を特定できるものはないわね。……あとは、写真の裏を調べていて、一枚だけに書かれていた文があつて」

そこで口を止め、美里は小夏を気遣うような視線をよこした。少しだけ迷ってから、答えるかわりにうなずいてみせる。それを受けて、彼女はジューパンのポケットから折りたたんだ紙を引きぬいた。

引き伸ばされ、コピー用紙に印刷された小夏の写真だ。表に攻撃的な言葉を書いた本人の字とは思えないほどに、その写真の裏面には弱々しい言葉がつづられている。

S H E E N A をかえして。

これをもつて、女性の字だと判断したのだろう。表と同じペンを使っているながら、角の少ない丸めの筆跡と小さい文字。おそらくこちらが、犯人である彼女の本心だ。

美里はその紙をすぐに引きもどし、眉を寄せた。

「十中八九 S H E E N A のファンだから、この件はそちらだけに預けておくわけにもいかないかな」

初めての共同制作の相手だから、と野宮に諭されたことを思い出す。S H E E N A のコラボ楽曲を快く思わない彼のファンが、その敵意を小夏に向けてきたのか。相手が小夏　女性歌手であったことはことさら彼女の怒りをあおっただろう。

「学校にも送ってあげたいぐらいなんだけど」

野宮の言葉に、小夏はぶんぶん首を振った。そこまでされてはたまらない。プライベートを仕事に持ち込むのも、仕事をプライベートに持ち込むのもまっぴらごめんだ。

しばし沈黙した控え室に、美里が拍手を打つ音が響きわたった。妙案でも思いついたように、そうだ、という明るい声を出したけれど、その動作の主は他ならぬ彼女だ。嫌な予感しか覚えない。

「小夏ちゃん、私の弟に送らせるわ」

「はい？」

野宮と小夏の声が見事に揃った。指揮者のように、美里が人さし指を振る。

「うちの子なら小夏ちゃんと知り合いだし。それに同じ学校だから」

「うそ!？」

「本当よ、……やっぱり知らなかったかあ」

美里が頭をかいた。

そんな馬鹿な、とは思ったけれど、考えてみれば学校の話などしたことがない。制服のない私立の学校では同じ学校の生徒だと見分けることも困難で、そして彼と顔を合わせたのはそのほとんどが休日だった。統一された鞆も、平日でなければ持ち歩く必要はない。

そもそも、部活動に手を出さないため交友関係の狭い小夏である。自分のクラスにいるならまだしも、他クラスともなれば名前と顔が一致するのは数人だけだ。

「でも連絡先は知ってるのよね？」

心臓がはねた。

「なんつ、で、知って」

「和樹に聞いた」

交友関係も筒抜けか。

おそらく姉の方が無理やりに聞きだしたのだろう、へそを曲げている弟の姿までありありと想像できた。この姉弟の中では、隠しごとにもないらしい。

「どう、野宮」

「まあ、小夏ちゃんがいいのなら、それが安全かもしれませんね」
渋面をしながらも反対する気はないようで、こくりとうなずいた。ふたりの間でほぼ固まってしまったその案に、小夏一人があらがえ

るわけもない。

「……わかりました」

とうなだれる以外に、道はなかった。

蔓の香り、純粹な

すっかり忘れていた、と片手で顔を覆った。

役が割り付けられないことは知っている。小夏が多忙をよく理解してくれているクラスメイト達がいるゆえに連絡がなかったのだと、納得もいった。いつもの仕事にライブ前の打ち合わせ、さらに“あんなこと”があつてごたごたしていたから、正直を言う学校のほうが目を向ける余裕がなかった。

「そうね、そうだったわ」

ひとりごちると、つかず離れずの距離をおいて歩いていた和樹が眉を寄せた。

「忘れてたんだ、文化祭」

そう、文化祭だ。

私立校の文化祭の日程は、公立のものとはずれることが往々にあるものだ。仕事に勉強にと駆けまわっていたなかでも、他校の生徒が文化祭の用意をしているのを目にしていた。そういえば自分の学校はいつだったかと和樹に尋ねたところ、また呆れ顔をされたのだ。

今週末、だ。今日が月曜日だから、もう五日を残していない。

「クラスで話し合いとかしてるはずじゃない？」

「そりゃあ出るけど、準備まではね……。あんただってそうでしょ」
「え、おれは」

歌手の仕事と勉学を両立するので精一杯だ。学校行事となると手も出せないのが通常で、当然和樹も同じものだと思っていたのだけれど、口を濁された。はいはいお疲れさま、と話を流す。学校生活にまで踏みこむつもりはない。

かといって仕事仲間というわけではないのだから扱いに困る。携帯の連絡先もいまだカテゴリ未設定のままだ。

「とにかく、学校に入ったら離れてよね。まあ下駄箱は違う方向だ

ろうけど」

「……となりのクラスだって、知らない？」

初耳だ。

というより、知ろうとしなかったただけだった。雨宮小夏のファンで、正体は人気絶倒中の覆面歌手である、近所に住む少年。わかっていることはそれだけで、椎名和樹という人間のことを、小夏は知らない。

ふり払うように首を振った。だから、なんだと。

「友達になにか言われるのも嫌だし、……そういうことだから」

了解の返事を聞いたところで、学校の門をくぐった。

意図してか、それとも単に小夏が足を速めたせいかわからない、和樹との距離が離れる。それを詰めようという気配はなく、心のどこかでほっと息をついた自分がいた。

校内に入ってしまったえば、聞きなれた喧騒が耳に入ってくる。付近の公立高校より設備が整っていることが特徴と言える特徴で、あとは中につまっているものも、生活も、変わりはない。あえて挙げると、少しばかり女子生徒の数が多いくらいか。

学年と組、名簿番号で定められた、番号を頭のすみでつぶやいて、合金製の靴箱の扉をひらく。脱いだばかりの下足をそこに入れる代わりに、青い線の入った下足を二本指で引き抜いた。

じゃらり。

金属がこすれ合うような異物の音に疑問を覚える。手に伝わる靴の、その重みがいつもよりずしりと伝わったような気がした。違和感のままに、軽い作りの上履きに目をこらす。

瞬間、腹を殴られたような衝撃が来た。

(……う、そ)

悲鳴をこらえたのは、かろうじて残ったプライドのためだ。

目の前の景色が一瞬ゆがんで見えたのは錯覚だろうか。心臓を握られるような嫌悪感に襲われて、倒れないようにと足をつっぱって耐えるのが精一杯だった。

上履きのなかには、それぞれ十を越える数の画鋏が放りこまれていた。ぎらりと光る先端からは、明確に小夏を傷つけようとする意志がうかがえる。

足を、ではなくて。

心を。

怪我をさせたいのなら、ひそませるそれは一つでいい。画鋏の存在に気付かずに足を踏みおろせば、先は考えずとも見えている。

（それを、しなかったのは）

伝わるのは、悪意。小夏を厭う人間の。

小夏さん、とやわらかな声がかかった。和樹のものだと顔を見なくても分かる。先に校内に入っていったはずの小夏が下駄箱にいることを、怪訝に思ったのだろう。

「どうしたの」

黙して答えない。なにもないと虚勢を張るには、和樹が訪れるのが早すぎた。

うつむいた小夏の背後に立った彼が上履きをのぞく。はっと息を呑んだ和樹は、無言で小夏から靴を取り上げた。あっと思う間もなく、鎖のような音が靴の中で響いて、それから足元へ振り落とされる。

石造りの玄関の床に、金色の画鋏がはね返って輝いた。それを冷たい目で見おろして、和樹は低い声で問う。

「……いつも？」

その声色は無言を許してはくれない。ゆるく首を振る。

「はじ、めて」

そうして出た声は、自分のものとは思えないぐらいに弱々しかった。

ありがちな嫌がらせだと割り切ることは簡単で、だからこそそれが自分に襲いかかるとは思っていなかった。いまだきそんな、と思うような行為が、確実に胸の奥をえぐる。

他人に嫌われることを恐れたことはない。歌手として働くことが

決まったときから、すべての人間に愛されるなどという夢物語は捨て去った。自分を好いてくれる限られた人々に、最高の歌を届けようと胸をはるのが最善だ。そう自分を戒めてきた。

（あ、だめ、だ）

目に映る世界が揺れるのを、手の先から感覚が失われるのを、吐き出した息が震えるのを、止めることができない。

最善を尽くしても、人気は取り落とした。自分を上回る歌手の存在はあった、それなら耐えられた。なのに。

たくさんの“好き”を失っていても、純粋な悪意を受けられるのは。

（……くるし、）

息が止まる。吐きそうだ。いつその胸の奥にあるものを、すべて取り出して捨ててしまいたい。

「さん、小夏さん」

「え、あ」

呼びかけられて、やっと顔を上げた。からになった靴を手わたされ、その向こうの和樹が顔をくしゃりとゆがめているのを見る。ここにいない相手に怒りの矛先を向け、動けなくなった小夏の代わりに悔しがつて。

それで、歯止めがかかった。

たとえ同じ学校に通っていても、たとえ同じ歌手だったとしても、彼が自分のファンであることにはかわりはない。雨宮小夏を応援するひとりだ。弱い姿は見せられない。

瀬尾小夏は、雨宮小夏を、守らなければ。

「だいじょうぶ。……ありがとう、靴」

不意打ちを受けたというように、和樹が眉をはねあげた。なにか言葉がかけられる前にと、すぐに彼に背を向ける。

「平気だから」

身をひるがえしたために踊った髪は、光に透かせば茶がきらめくことを知っている。肩甲骨のあたりまでとどまらずに流れるそれは

彼女の気性を示すよう。ずいぶんと軽くなった上履きに足を通して、廊下に靴音を響かせた。

強くなければ、と自分に言い聞かせる。

（ファンのために、もっと）

雨宮小夏は、そんな少女でいるべきだ。

案の定通学の様子は見られていたようで、教室に入った途端にふたりの少女に囲まれた。日ごろからよく会話をしている相手だったから、小夏への調査係として選ばれたのかもしれない。周りがちらちらとこちらの様子を見ていることは、ほんの少し意識すればよくわかった。

「書記くんと仲いいの？」

「書記くんって」

「二組の椎名くん！ 生徒会の書記でしょ」

どうやら、また自分が知らなかったらしい。今までの数週間とここ数日、手に入れた彼の情報量ははたしてどちらが多いだろうか。

小夏は自分の通学鞆を机において二人をふり返った。ともあれ、疑惑は早めにつぶしておくに限る。

「そんなに仲がいいってわけじゃ」

「じゃあどうして」

なくて、と続ける前に質問がきた。この友人はひとの話をよく聞かない節がある。

（どうして……ねえ）

うまい返答を探す。SHEENAのことを隠して説明するにはどうするべきか。逡巡してから、今聞いたばかりのことを利用させてもらうことにした。

「生徒会から文化祭で歌ってくれないかって話が来てて、誘われてただけ」

断ってやったけど、と歯を見せれば、期待はずれだともいう

ように二人が唇をとがらせた。同時に、小夏たちに横目を向けていたクラスメイトたちが騒がしさを取り戻す。またたく間に関心が失せたらしい。

「なあんだ。ちょっと期待してたのに」

片方が肩を落とし、もう片方がうんうんとうなずく。

「小夏、そういうの興味なさそうだったし」

「そついうのつて……」

「男の子とか、流行とかね」

苦笑して席に座った。事実なので否定もできない。

男性とつきあっているような時間もなければ、流行を追って右往左往するようなことも嫌だった。ファッションや体型維持、他人の目に映るようなことには気を使うけれど、それ以外にはてんで関心がわかない。もっとも口にすれば彼女たちにブーイングを浴びるのは目に見えているので、なにも言わないのだけれど。

くすくす笑っていた少女が、ぴんと指をたてた。おもしろがるように言う。

「ミステイも知らないでしょう、このぶんだと」

みすてい。オウム返しにつぶやけば、もうひとりにため息をつかれる。その名前を出した少女がひよこひよここと自分のペンケースを持ちだしてきて、そのなかのペンを一本、小夏にさし出した。

「文房具のブランドなんだけど、ほら」

そうはいつても、それはペンの形状をしていなかった。長い口紅を模した形をしていて、霧に包まれた蝶のロゴが高級感を漂わせている。口紅と同じ要領でふたを開けるとペン先が出てくる仕組みになっているようで、その洒落たデザインが人気を集めているのかもしれない。

「ふうん」と。返した言葉は、結局それだけだった。

子供と大人のあいだ、中高生の少女たちをターゲットにしているのだろうと予想はついた。ついたけれど、それまでだ。可愛いとは思っても、わざわざ手に入れようとは思わない。嫌な女子高生にな

ったものだと思っ

小夏の冷めた反応に焦れてか、少女がペンを指さした。

「かわいいだけじゃないんだよ、それ」

「え？」

尋ね返しても、にやにや笑いを返されるばかりだ。まだ仕掛けがあるらしい。太く赤いペン先をじっと見つめて、なんの気なしに息を吸う。

ふわり、と。

肺に満ちた香りに、反射的に顔をしかめた。

あの事件の苺の香りと同じだ。バツの印と鮮烈な言葉が脳裏に浮かんで、眉間にしわが寄る。それからしまったと思っ、すぐに笑顔を作った。

「苺のにおい？」

「ロマンシング・ストロベリー」

ペンの持ち主である彼女が、そこに刻まれた筆記体の文字をさし言う。デザインだけでなく名前にもセンスを追求しているらしい。そこで予鈴が鳴って、小夏はペンを返してから二人に手を振った。あらかたの生徒が席に着いたところで、教師が教室に入ってくる。

一気に緊張が解け、窓の曇りをぬぐうように表情が落ちていくのを自覚した。思わずもれてしまったため息に、片手で口をおおう。歯を食いしばっていなければ、ふとしたときに弱音を吐いてしまっそうだった。

小夏の上履きに画鋏を入れたのは、事務所に写真を貼り付けた人物と同じだろうか。学校にすらも自分の敵を作ってしまったのか。

（学校も、仕事も、わたしの居場所なのに）

どちらも失ってしまったら、どうすればいい？

見ないふりは許されない。耐え続けるか、それとも、戦うか。相手の姿が見えないままでは、前者を選ぶことしかできない。それはどこか、S H E E N Aの正体を知らずにいた頃に似ていた。

ただ、今回は。

（嫌われているのは わたし）

和樹と初めて出会ったとき、敵対心のままに伝言を頼んだとき、彼はそれをどうやって消化したのだろうか。小夏のファンだとためらいもなく言えてしまうような彼が、その小夏に苛立ちをぶつけられている状況を。

（……ごめん）

声にならない声で、ここにいない相手につぶやく。

謝罪と同じ言葉で助けを求める自分が、みじめだった。

雨空の教室

昼ごろから降りだした雨は、やむことを知らなかった。

最初のしずくが落ちたかと思えば雨はすぐに勢いを増し、屋根を叩いて、その下の学校を一瞬のうちに静けさに閉じこめた。

午後の授業を終えても雨は落ちつかず、ため息をついた生徒たちは、それでもひとりまたひとりと教室を後にしていった。電話で何事が喋っていた少女は親に迎えを頼んだのだろう。意気揚々と歩いていった少年は、念のためにと傘を用意しておいたのか。彼らも出ていって、やがて教室のなかには小夏だけが取り残された。

窓ぎわの最後列の席で、ひとり、音を聞いている。降り続く雨音を。教室から少しずつ人の声が、その足音が消えていくのを。そして、机に突っ伏した自分の、深い呼吸の音を。

先ほどから、携帯がモバイルライトを点滅させているのを知っている。着信音もバイブ機能も切っているためにちかちかするだけのそれは、歌を失った歌手に似ていた。

表示されているのは和樹の名前で、もう何通もメールが届いている。いつ学校を出るかと問いかけられるのを、ずっと無視し続けていた。一度だけ電話がかかってきたけれど、それもすぐに途切れてしまった。彼にも気恥ずかしいところがあったのだと思う。それきり着信はないままで、ついにあきらめたのだと頭のすみで考えた。

返事をしない理由は明確だ。帰りたくないから。帰って、また明日を迎えるのが嫌だからだ。

子どもっぽいことを、と思う。　　ずっとここにいられるわけではないのに。

「小夏さん？」

うかがうように、名前を呼ぶ声。教室の前の扉からだ。顔を少しだけあげて、そこに立つ和樹の姿を確認するとまた伏せた。

「メール届いてなかった？　そろそろ帰ろうと思って」

「……雨が降ってるから。傘もないし」

苦しまぎれの言い訳も、それとは気づかれなかったようで、大丈夫、と返される。

「姉ちゃんが迎えにくるって言うから。玄関で待たないと」

用意周到なところが憎らしい。

何事にもそつがないのだ、と理解している。対人関係も、学校生活も、なにもかも。

「まだここにいます。先に帰って」

「できないって分かっててそういうこと言う……」

「ほつとして」

会話を絶とうと声を硬くした。組んで額の下に置いていた両手に、力がこもる。

彼のためらいの気配が伝わり、ややあつて、離れた位置から床に椅子をひきずる音がした。ちらと目を向ければ、教室の中心あたりの席に和樹が腰をおろしている。

（出ていけばいいのに）

姉に事のしだいを報告するなり、自分のクラスに戻るなりすればいいものを、わざわざここにとどまるつもりでいるらしい。小夏が歩みよりを拒否していることぐらい、おそらく彼も感じているだろうに。

どれだけ経ったか、根気比べのような長い沈黙のあとに、和樹がひとつため息をついた。

「小夏さんさあ、がんばりすぎだと思うよ」

ひとり言のような声は、ともすれば雨にのまれて消えてしまいそうだった。

和樹がこちらに気付かないよう、ひそかに顔を向けて耳をそばだてる。彼は猫背ぎみの体を背もたれに預け、黒板をながめたままで動かない。その顔は見えないけれど、また穏やかに目を細めているのだらうと想像するのはたやすかった。

「少しぐらい弱音吐いたって、だれも責めたりしないし」

そこで口を止める。慎重に言葉を選ぶから、きっと彼は無駄にしゃべることをしないのだ。

「嫌いになったり、しないから」
なら。

和樹の言葉に、無言のまま反発する。

（それなら、雨宮小夏を、だれが守るの）

妬みも恐れも知らない純粋な彼女を、守る人間がどこにいる？

瀬尾小夏も、雨宮小夏も、どちらも自分であって切り離すことは不可能だ。瀬尾小夏が傷つけば、彼の言うとおりきつと誰かが支えてくれるだろう。胸の奥にためこんだ鬱屈した感情を吐き出しても、受け止めてもらえるかもしれない。

けれど雨宮小夏には、誰もいない。分かちあうことができるのは同じ自分だけだ。それがプロであるということではないのか。

歌手としての重荷ぐらい、ひとりで消化できなければいけない。

周囲より早く社会に足を踏み入れたのだから、相応の責任を負わなければ。

「わたしはプロだから」

そう言つて、また黙った。

幾度となく自分に言い聞かせてきた言葉だった。自分を拘束する言葉であり、奮いたたせる言葉でもあった。悔しさを与えられればそれは向上心に変わったし、強くあらねばという自責の念はひたすらに自分を追いこんだ。

だから今回だって、いつかはひとりで立ちあがれる。そう信じているから、今は我慢するだけでいい。

和樹が体ごとふり向きかけて、動きを止める。背もたれにかけようとしていた手をおろし、姿勢を戻して、すねたようにぽつりと言った。

「……かつこよすぎだ、小夏さん」

「はあ!？」

思わず大声が出た。和樹も負けじと声をはりあげる。

「なんで寄りかかろうとしないかなあ！ 周りの大人だっている、役に立たないかもしれないけどおれだっているし、ここには友だちだっているんだろ！？」

目をみはる。この少年が声を荒げるところを、初めて見た。

すでに意地だろうが、教室の前の方を向いたまま。聞き分けのない子供を叱るような口調で、それでいて苛立ちをぶつけるように、呼吸の音さえも聞こえてきそうなほどの剣幕で。

「おれだって小夏さんの話を聞きたいんだ。プロって、……プロって、なんだよ。全部ひとりでなんとかしようとするのが、そうじゃないだろ」

「しいな」

「もうちよつと、ちよつとぐらいさあ……」

勢いが徐々に消えていき、比例して背がまるくなる。しまいには下を向いて、おろした両手を握りしめて。

「疲れたとか、助けてとか、つらいとか、」

言つてよ。

その声が、雨に溶けていった。

さらに何ごとが続けて、打ち消すように小さく首を振る。窓を叩く雨音にきられてしまい、もごもごとした彼の声は届かない。彼自身、もはやそれらを小夏に伝えようという思いはないのかもしれない。

憤りは、なんのためだろう。

間違いなく小夏に向けられた文句は、けれど、暴言の体をなしてはいなかった。むしろそうであれば反論のひとつもするものを、言い返す気力すら腹の中で薄れていつてしまった。

そっぽをむいている彼は、きつといじけているのだと思う。言いたいことを言いきつたのだという満足感すらないのだということは、後ろからそれを聞いていた小夏からも見てとれた。なににおいても器用なくせに、なぐさめの言葉すらうまくは言えないのだ。

それでも小夏を放つてはおけなくて、ええいままよと胸中のもの

を叫んで。あとに残った後悔と沈黙とに板ばさみにされて、今ごろは眉間にしわを寄せているだろう。

なにか言ってくれ、と思っっているはずだ。これではどちらがなくさめられているのか分からない。

（ああ、もう、馬鹿）

ぷつ、と吹きだした。こらえられずに、のどの奥で笑ってしまう。

「笑つ　「今度こそ立ちあがって小夏に向きなあった和樹は、そこで、あ、と声をもらした。しかめっ面が、すぐに困惑へと色を変えていく。

「なに、あんた……あはは」

心の中で、馬鹿、と連呼する。そんなことなど思いもよらないだろうに、彼は眉を八の字にした。

止まらないのだ。

堰が壊れてしまえば、あふれる涙におさえがきかない。笑いもとどまるところを知らないから、はたから見れば自分はさぞ情けない泣き笑いの顔をしているに違いない。

そんな小夏に和樹は戸惑うばかりで、もう一度背を向けるべきかと悩んでいるようにも見えた。ずっと小夏に背を向けてしゃべっていたのは、彼女が涙を流しても目に映さないようにという和樹なりの配慮だったのかもしれない。

目をこすって、腫れるだろうな、と少しでも心配する。止め方も分からなくて、鼻をすすれば恥ずかしさとおかしさでまた涙が出る。人前で泣くどころか、こんなふうに泣くことさえ初めてで、しかも相手は泣いている女にハンカチ一枚差しだせないような男なのだから目も当てられない。

しかも、そんな男の前で涙を流し続けるのは、ほかならぬ自分なのだ。

「あー、もう。泣くなんて」

おどおどこちらをうかがっている和樹に、当てつけるように言う。

謝る言葉なんていらなかった。ただ、気付かないでいてくれたらそれでいい。

（わかつてなんか、いないでしょう）

わたしが、こんなふうに泣いてるのは あんたのせいなのよ。
“ おかげ ” だなんて殊勝なことは心の中でも言えなくて、不意にあいた沈黙をごまかすために、小夏は自分のハンカチで両目をぬぐった。もう周りの赤みは取れないだろうけれど、涙は役目を果たしたとばかりにぴたりと止まってくれる。すん、と鼻を鳴らして、和樹の顔を視界にとらえた。

「わたし、負けないから」

小夏を支えるものは、歌への気持ちと強い負けん気。

自分に言い聞かせるつもりで言ったそれに、和樹は唇を引きむすんでうなずいた。そして、ふと神妙な表情をする。

「小夏さん、確かライブがあったよね。取りやめたんだっけ」

「名前も知らない誰かさんのせいだね」

もはや苛立ちしか湧いてこない。怯えていたのが嘘のようだ。そうだね、と和樹が苦笑し、それから口の端をつりあげた。

「そのライブ、やろう」

「やろうって、あんたねえ」

「マネージャーさんに止められてるのは知ってる。……でも、おれたち、高校生だよ」

「それがなにか……」

問おうとして、はたとする。高校生、そして学校の持つ特性とはなにか。だんだんと理解が追いついてきたものの、彼が思いつくような案にしては突飛だ。

和樹は小夏の狼狽を読みとったのか再度うなずいて、いつになく自信ありげな表情をしてみせる。

「歌おうよ、小夏さん」

にやりと微笑む、それを見ればすぐに納得がいった。突如の発言の理由なんて考えるまでもないことだ。こんなことを思いつきそう

な人間を、自分はもうひとり知っているのだから。
(似てないなんて、どうして思ったのかしら)

あの姉にして、この弟ありとはこのことだ。

きみの歌をきかせて

「おもしろいことやってるみたいねえ」

ぎくりと肩をゆらしてふり返れば、満面の笑みをうかべた姉が視界に映った。

「とく、には」

落ちつけ、と自分に言い聞かせて、精一杯の無表情をつくりあげる。

特には。もう少し言いようがあっただろうとすぐに後悔した。

小夏を家まで送り届けて、姉弟ふたりで帰宅した途端にこれだ。

相対する和樹はあくまでも平静を装うけれど、万に一つも勝ち目がないことは経験上よく理解している。

美里は品さだめでもするように和樹をねめつけてから、ふうん、と気のない返事をする。車のキーを化粧台の前に放りなげて、代わりに床のうちわを拾い上げた。雨が降っているとはいえ夏の蒸し暑さは健在で、彼女はぱたと自分をあおぎながらもう一度和樹を見やった。

「それで、なに？ 小夏ちゃんと何するの？」

「なにもないって！」

小夏の名前が出てきた時点で、この人にはすでにあらかたの予想がついていると考えていい。なにを隠しても姉の前には意味をなさないのでから。

二年前、知人全員に隠れて近所のライブハウスで歌っていたときも、彼女に見つかってそのまま事務所へ引きずられていった。それが歌手デビューにつながってしまったのだから、人生なにが起こるか分からないものだ。

隠しごとをかぎつける鼻、ではない。美里は常に新しいものを求めているだけだ。その意味では、どんなアーティストよりも彼女のほうが優れているのではないかと和樹は思う。その審美眼をそのま

まマネージャーの手腕に移しかえてしまっ、つくづく万能な姉だ。
黙秘を貫いていると、うちわで頭をおさえつけられた。それだけの重みが、万力で締められているかのような圧力を和樹に与えてくる。

「野宮に言っよ、嫌でしょう？ 話しなさい」

「そう、いう、のを、脅迫っていうんだけど」

「姉弟間でなにが脅迫よ」

身長差というものは大きい。こういうときに頭上から見おろすことができれば、あるいは姉に対しても強く出られるのだろうか、と考えて。

（無理だな）

結論が出るのは早かった。

了承を示すために何度かうなずいてみせると、よろしい、とばかりにうちわがのけられた。先までの圧力はどこへやら、美里はけりとしてふたたびそれを上下させる。

「それじゃ代わりに、ちょっと頼まれてほしいんだけど」

「内容によるわね」

「大したことじゃないよ」

自分の予想が正しいなら、これを実行に移せば事件の犯人は動いてくるはずだ。むしろ今回の計画は犯人の陽動が狙いだといっている。事務所への嫌がらせにまで出られた今、早急に捕らえてしまわなければ、文字通りこれから相手がなにを仕掛けてくるかわからない。

自分の存在が小夏へ怒りを向けさせる原因になったことは、美里とふたりになったときにきつく言い聞かせられた。犯人は間違いない。SHEENAの熱狂的なファンで、コラボ楽曲が犯行の原因になったのだと。

責められてもおかしくなかった。

けれど、あの人は、自分で抱えこんだ。

原因を知っていてなお、なにもかもを“プロだから”という言葉

でおさえこんで気丈に振る舞おうとした。もし返信がなかったことに疑問を感じなければ、もし教室へ迎えに行かなければ、きっと彼女は明日からも強い女性でいようとしただろう。

そして自分は、それに気付かなかったに違いない。

（小夏さんの弱さを、知っているのはおれだけだ）

だから、守ろう。

「事件の犯人を、捕まえたんだ」

自分に音楽を与えてくれた彼女が、いつまでも歌っていていられるように。

前日の天気予報で心配されていたとおりに、朝から小雨が降りしきっていた。文化祭実行委員や生徒会は渋い顔をしたけれど、その雨を補ってあまりある集客があることは明らかだった。

学校のいたるところに貼りつけられたビラに、映されたモノクロの写真は人気歌手の立ち姿。それでいて、あおり文に記された名前は芸名ではなく彼女の本名だった。同じビラは町内のところどころに見られ、本人の籍が置かれた事務所の近くにもこっそりと貼り付けられている。

小夏は体育館の入り口で足を止め、ビラを見あげた。普段はおろしたままの髪を、今はピンでまとめあげて紺色の地味なキヤスケットにしまっている。きつくなりがちな目をおおうのは、度の入っていない眼鏡。毎年の文化祭で人目を避けるために身につけた術だ。生徒会がビラ制作や舞台の用意、その出費を申し出てくれたのはありがたかった。無償の親切ではなく、もちろん文化祭への集客力を期待してのことだろう。小夏が歌手となっってはや二年、頼まれづけてきた出演に応えた形になった。

あくまでもいち学生、瀬尾小夏としての見せものだ、と念を押したにもかかわらず、雨宮小夏の写真を使ってくるあたりがあざとい。

「もうちょつと写りがいいのがあるでしょうに」

「そこ？」

かたわらで苦笑した和樹は、左腕に腕章をつけている。生徒会執行部、つまり各委員会の正副委員長や本部役員が装着を義務付けられているものだという。書記くんと呼ばれて親しまれていることは、文化祭の準備に駆けまわる姿を見ていれば納得がいった。どこへ行ってもあの情けない笑顔を浮かべているのだ。

「あんまり大々的にするとはれるからって、一応おさえさせたんだ」「事務所の近くに貼った時点ではれてるでしょ。野宮さんに怒られるわ」

ふうと息をついた小夏も、もとより反省するつもりはなかった。

あれから五日、毎日のように続けられたいじめまがいの行為にも耐えぬいてきたのだ。犯人を捕らえて、二言三言、説教してやらないことには気がすまない。

「一緒に怒られるよ」

そそのかしたのはおれだから、と和樹は首のうしろをかいた。

『おれたち、高校生だよ』

そう言った彼の案はシンプルだった。

歌手である雨宮小夏としてライブを行うことが許されないのなら、瀬尾小夏という個人で学校で歌えばいい。事務所もライブ会場も巻きこまず、かつ学校という独立した空間で、無償で歌うことまでは規制されないはず。それがたてまえだ。

その目的は、小夏に攻撃を仕掛けた犯人を捕らえること。学校でライブを行えば必ず動いてくる、と和樹は確信しているようだった。その上で、他人を巻き込んだ暴動までは起こさないともしきった。翌日には姉までも味方につけたようで、小夏としては彼女の立場を危ぶむしかない。事務所の人間ならば止めるべきだと思うのだけだ。

校外に通じる扉から体育館の横を通り抜け、ステージ裏の小部屋の扉をひらく。部屋に差し込んだ明かりに気づいて、座って待機し

ていた少年がふたりを見上げた。彼もまた、左腕に腕章をつけている。

「時間は？」

和樹が問うと、少年は床に放られていた携帯電話をひらいた。

「あと十分つてとこ。瀬尾さん、もう準備できたのか」

「ええ、衣装合わせもメイクもないし」

むしろ変装を解くだけだ。伊達眼鏡とキャスケット帽をはずし、ゆるく縛ってピンで留めていた髪をおろしていく。丁寧に手ぐしでとかすと、茶のまじった髪が波打った。薄暗い部屋では映えないが、それでも頬や目にはいくらかメイクが施してある。頼む相手がいないので、今回は自分で整えた程度だ。

「緊張とかしない？」

「こんな人数相手に？」

鼻で笑って返す。高校の体育館ではぎりぎり千人がいいところだ。オーディションの決勝戦にだって、もっと多くの観客が集まっていただろう。

「はは、頼もしいや。……じゃあ和樹、あとは」

「わかった」

少年はふたりと入れ替わるように扉から姿を消していった。スタッフがひとり、ここに残っていればいいのだろう。小夏の出番が終わるまでは、彼女のライブの企画を持ち込んだ和樹が担当に入れたらしい。

ぱたりと扉が閉まるのを確認して、小夏は眉を寄せた。

「緊張なんて、いくらやっても慣れないわよ。あたり前じゃない」

「だから、そういうのを言えればいいのに」

「言ってどうすんのよ」

自分で折り合いをつけないければならないものを、どうしても他人に押しつけられるだろうか。この性分は誰になにを言われても治りそうにないらしい。

小夏は肩と首を回し、いくつかのストレッチをそれにつづけた。

声出しもしておきたかったけれど、人目を集めてしまつからとあきらめる。ステージでならしていこうと決めて、軽い運動だけをこなしておく。

その様子を眺めていた和樹に気づいて、不機嫌さを隠しもせずに「なによ」と声をかけた。和樹はあわてて手を振る。いや、あの、と否定するようにつぶやいて、やがてぴたりと動きを止めた。

「生で小夏さんの歌を聴くのは久しぶりだと思って」

「ああ、昔のライブとか来てたの？」

「最初のだけ。事務所の新人だからって、姉ちゃんに誘われて」

小夏があからさまに嫌な顔をして見せれば、和樹はつ、と目をそらす。

最初のライブなど見られたものではないだろう。初めて自分のために作られた曲に興奮して、少人数の前で飛んだり跳ねたりと騒いでいたことぐらいしか覚えていない。

「あんなに幸せそうに歌う人を、はじめて見たんだ。歌って、そんなに楽しいものだったんだって」

「うるさかっただけよ、あんなの……」

和樹が首を振る。

やわらかく細められたその目に、どきりとした。

「いつか一緒に歌いたいって思った。でも、デビューしたときには小夏さんはずっと先にいたから」

彼のメジャーデビューは、確か小夏がそこそこ名を上げてきた頃だったはずだ。自分が歌手になった年の冬あたりだろうかと頭をめぐらして、苦い思い出がよぎった。小夏が有名になったあとから、SHEENAがぐんと売り上げを伸ばしてきたのはまだ記憶に新しい。

「同じところに立ちたいって、それだけ考えて歌ってた。やっと手が届いたと思ったのが今年になってからで……それで」そこで間を置いて、記憶を確かめるようにうなずいた。「コラボを申し込んだのが、夏のはじめ。あんなに嫌われてるとは思わなかったけど」

「あー…… あれは、ごめんなさい」

くつくつという笑い声とともに、「いいよ」と返される。

「一緒に歌えただけでうれしかった。小夏さんにも、認めてもらえたみたいだし」

小夏の背を支え、羽ばたかせる歌声。自分の歌のくせをよく理解していると感じたのも当然だ、彼は何度も、それこそ何十回も、雨宮小夏の歌を聴いているのだから。そのうえ決して我を通すことなく、さらにサポートに回るだけのいやらしさも感じさせずに楽曲をつくりあげてきた。そのさりげない演出は、彼の性格に由来しているのかもしれない。

ステージに続く扉の向こうで、歓声と拍手があがった。それまでステージで踊っていた少女たちが演目を終えたのだろう。小夏はひとつ深呼吸をして、扉ごしのステージを見すえた。

胸を張って、背筋をのばして、不遜な態度の奥を悟らせぬよう。

どんな舞台にも凜とあるのが雨宮小夏だ、デビューを果たしてから一度たりともぶれはしない。

「見てなさい」

和樹の姿が視界のなかになくとも、背を向けたそこに彼がいることは確かだ。扉の奥の興奮と期待が伝わってくるこの部屋で、彼の穏やかな呼吸に耳をすます。弓の弦のようにぴんと張りつめた緊張感は、そうそう味わるものではないと小夏は思う。

「今のわたしの歌を、聴かせてあげる」

響け。

瀬尾小夏と雨宮小夏の、ふたりの自分を知る彼に。

ミステイの苛立ち

この高校は、東西に伸びる三の字を二本の渡り廊下でつないだ形をしている。

最北の体育館で歓声があがるのを、少女は遠くに聞いていた。教室が並ぶこの棟には人気がない。おそらくほとんどの生徒や来客が、体育館のライブへと向かったのだろう。ときおり教師が通りすぎるだけの廊下は、午前の盛況が嘘のように静まっていた。

ひとつの教室の前で立ちどまり、少女は両手を強く握る。生徒が誰ひとりとして教室にいないことは知っていた。

あまみやこなつ。

愛するS H E E N Aを奪っていったあの女。

(ゆるさない、絶対)

がらりと引き戸をひらいて、明かりがついたままの教室に身をすべりこませた。

机を積み上げた上に暗幕がかぶせられ、教室を二等分する壁をつくりあげている。その幕をめくり、並んだ荷物のなかから、数分で目当ての鞆を見つけて引きぬいた。

「なにが、人気歌手よ」

少女の右手には、口紅の形状をしたペンがある。ミステイのルージューシリーズ、ロマンシング・ストロベリー。

「なにが、なにが、なにが」

ゆるさない。

他にはなにもいらなかったのに。S H E E N Aさえいれは、その歌さえ聴ければ、それでよかったのに。

すべて あいつが、持っていた。

「雨宮小夏……っ！」

ペン先を現し、鞆に向けて。

先ほどひらいた扉が、思いきり開けはなたれる。教室内に響きわ

たった雷鳴のような轟音に、文字どおり跳びはねた。

「は、な、なに」

ペンを引いて背後を見る。にんまりと、見ている方が気味が悪くなるぐらいの笑みを浮かべる女性が、少女の顔に影を落としていた。「みーつけた、犯人ちゃん」

だれ。

口の中で声にもならなかった言葉を、相手は拾いあげる。

「SHEENAのマネージャー。って言って、伝わる？」

出された名前に、思わず息をのんだ。伝わるみたいね、と、女性が目を細める。

「あの子が言うから見張ってたら、本当におびき寄せられてくれるんだもん。馬鹿な子って簡単でいいわねー」

軽い口調とは裏腹に、その声は低く、暗い。怜悯な視線が向けられて、少女はのどの奥をひくつかせた。

「小夏ちゃんを痛めつけるのは、楽しかった？」

それはまるで、今まで雨宮小夏に向けてきた刃を、裏返して突きたてられたようで。

女性が一步教室に踏み入れると、少女は無意識に後ずさっていた。少し遅れて、ペンを握った腕が震えていることに気がつく。女性がそれをちらと見て、つまらなそうに言った。

「そのペン、女の子の間ではやってるみたいね。学校の生活にも手を出してくるってことは、間違いなく学校の関係者に違いないし。」

まあ、あの子もよく考えたもんだわ」

よどみなくあげられる自分の行為を、少女は目を見ひらいたままで聞いていた。SHEENAのマネージャーが、なぜ小夏の私生活にまで目を光らせている？ 同じ事務所であつたとしても、あまりに立ち入りすぎてはいないか。

彼女の言う“あの子”とは いったい誰のことだ？

(そもそも)

たえ親しい存在であつたとしても、彼女の口からそんな話を聞

きだせるわけがない。それを理解したうえで、自分は行動に出たのだから。

（だって、あの女が他人に弱音を吐くはずが……！）

目の前に、女性がしゃがみこんだ。背の高い彼女の顔は、そうしても少女より頭ひとつ高い位置にある。自分の存在がどれだけ相手を威圧するか分かってているかのように、彼女は艶然とほえんだ。

「馬鹿な子って大好き。自分がなにをやっているか、どんな結果をもたすか、それがどれだけ他人にまる見えか、まるで分かっているんだから。好きだわ、吐き気がするくらい」

その手が少女の右手をつかんだ。声を上げてペンを取り落してしまい、無意識に拾いあげようとするやと女性の手にきつく力がこめられた。血が止まるかと思うほどの圧迫に、涙がにじむ。

「事務所でよくお話、聞きましょうか。ご両親も一緒にね」

「い、いやだっ」

身をよじつても、握りしめられた手首はぴくりとも動かない。燃え上がった怒りのままに相手をにらみつけて、そこで少女の反抗心は塵と化す。

冷たい笑みさえも消えた女性の顔には、ただ、軽蔑の表情だけが浮かんでいた。

「嫌だとも言えない彼女を、あんたは苦しめたの」

彼女の手に一層力がこもり、圧迫された手首の血の気が失せる。

そのまま腕を引かれて、少女はなすすべもなく立ち上がった。女性は頭上から自分を見下し、そして。

「思い知れ、ばーか」

妙齢の女性とは思えない暴言を、吐き捨てる。

真夏の体育館の熱気が、額に、首筋に、汗を伝わらせる。残響が館内にこだまして、くらくらする意識を強引に揺り動かす。

（何曲）

頭を騒ぎまわるギターの轟音が、いまだ抜けきらない。

（何曲、歌った？）

歯を食いしばって顔をあげれば、ひしめきあう観衆が視界に入っ
た。決してせまくはない体育館を、人の群れが埋めつくしている。

（この、次は。たしか）

ぎいん、と再びうなりはじめたスピーカーにはっとして、身をひ
るがえした。歓声が途絶え、歌い手を待つはずだったメロディがぴ
たりとやむ。それを合図と受け取ったのか、生徒たちはひとり、ま
たひとりとそろえて手を叩きはじめた。

背に聞く、アンコールの掛け声。

舞台袖に下がった小夏は、その薄暗い部屋でひざをかかえた和樹
に視線を落とす。彼は夢から覚めたようにぱちりと目をしばたかせ
た。いくらかして、会場をあごで示す。

「ほら、アンコール……応えてあげなよ。まだ一曲、入ってるはず
だからさ」

このライブのための音源も曲順も、すべて和樹によって用意、構
成されたものだ。歌ってみれば否が応にもその流れのよさに気づか
された。無理も悔りもなく、最後までこうして立ちつづけるだけの
体力を温存しておけるような。それでいて、会場の熱気を徐々に最
高潮へと導いていくような。

だからこそ、解せないのだ。

「あんたは、なんで歌わないのよ」

最後の歌に、あの曲を。

雨宮小夏とS H E E N Aのつくりあげた、あの一曲を入れこんだ
わけが。

「あれは わたしだけの歌じゃない！」
激昂する。

体育館を包み込むアンコールの声は、けれど、その叫びさえもの
みこんで、消し去っていく。和樹は痛みをこらえるような顔をして、

笑ってみせた。

「……ほら、S H E E N Aは前に出られないから
音が出るほどに、奥歯をかみしめた。」

「小夏さんの歌が聴きたいから、入れたんだよ」

嘘だと大きくかぶりを振った。何度も、何度も、シャワーを浴びた犬が滴をはじき飛ばすように。

それならなぜこの曲を選んだ？ 自分がステージに立つ気がないのなら、マイクを握る気がないのなら、どうして小夏のライブに組み込んだ？

S H E E N Aであることを言い訳にしまえば、可能性などという言葉は意味を為さない。

選ぶための猶予を与えられたのだ、S H E E N Aという名のその繭はたいそう心地がよかったことだろう。同じ場所にとどまって、ひとつを選ばずにいられる。自分を手に入れる代わりに、今まで手に入れたものを捨てる必要はない。

（そんな甘え、許さない）

わかっている。彼が選択を望まないはずがない。

だからこそ、彼自身が押しこめてしまった声にならない声は、歌という形をとった。和樹はそうして、小夏に手を伸ばしたのだ。その手すらつかんでやれないでどうする。

「あんたと歌いたい」

憎くて、悔しくて、妬ましかった。その才能の一部でも、自分にあればと幾度も願った。

それでも、気付いてしまった。

「この曲は、ひとりじゃ歌えない」

いつの間にこんなに弱くなってしまったのだろうと自分に問いかけて、それが弱さでないことを知った。小夏と歌いたかったと漏らした和樹の気持ちに憧れなら、自分の中にもそれはあったのだ。

彼でなければいけないと思った。歌声を聴いた日から、魅せられていた。

手を差し出す。うろたえた和樹が、のどの奥から声を漏らした。

「わたしは、あんたと　椎名と一緒にステージに立ちたい」

ほんの一瞬。和樹は泣く寸前のような顔をして、きつく唇を引き結んだ。背を向けた会場では生徒たちの拍手がテンポを増し、掛け声が熱を帯びる。誰もが小夏を待ちわびている。観客が期待を寄せる舞台こそ、歌手の居場所だ。

和樹の骨ばった手が掲げられる。光を求める夜の蝶のようにさまよったそれが伸びきる前に、強く握りかえた。

「できるじゃない」

にいつと歯を見せ、それを目にした彼が身をびくつかせたのを気にもかけない。そのまま体を反転させて、小柄な彼の背を突き飛ばす。空になった手で、床に放られたマイクを取り上げた。

バランスを崩し、片足で数歩跳ねた和樹が現れると、アンコールの声はどよめきに変わった。中心で立ちつくした彼が怒声を浴びるのも時間の問題だろう。

小夏はくすりと笑って、スポットライトのもとへ歩を進める。音響を担うステージ脇の少年に、無言で再開をうながした。どうにでもなれとばかりに荒っぽく機器を操作した少年が、小夏に向けてしかめ面をする。マイクの電源を入れ、歩み出た。

「聴いてください」

スピーカーから流れ出すギターの音圧が、そらをめぐって降りそそぐ。

うたは、あめ。

七色の光をまとって、ときには穏やかに、ときには激しく、ひとを潤す。ひとたび旋律が流れだせば胸は高鳴り世界が輝き、畏れにも似た感情に満たされていく。雨宮として生まれたもうひとりの小夏が、歌う喜びにうち震えていた。

自らを鼓舞して、音律を手のひらにつかみとる。どの音も取り逃がしはしない。息を大きく吸い込み、歌手という表現者として、あくまでも傲慢に。

（従えてみせるわ）

雨宮小夏は、屈しない。

レイニーソング

彼は椎名和樹なのだ、と、並び立つ少年を横目に思った。

大勢の観客の前で声を張りあげる姿も、緊張に震える体も、SH EENAでは持ちえないものだ。彼はそれこそ完璧で隙がなく、仮面の向こう側をのぞかせもしないような歌手なのだから。

少なくとも、共に歌う少年は、そのSH EENAではない。

椎名和樹はがむしゃらに音楽にしがみつく男の子で、ちっぽけな学生で、そしてなによりも表現者だった。小夏となんら変わらない、ただひとりの歌手だった。

だから、はじめましての歌を歌おう。

ようやく顔を見せた、彼の歌の始まりに。

太陽が少しばかり頭上を越えて、雲の切れ間から控えめに光を放っている。アスファルトにしみ込んだ雨粒をさらった風が吹き抜け、文化祭で配られていたヘリウム風船を空の彼方へと連れ去った。

体育館は続々と人を吐きだし、新たに呑みこんでいく。その人の群れから離れるように、小夏は校舎裏のベンチに腰をおろしていた。隣接する校庭では、野球部員が校内の祭り騒ぎをもともせず練習を続けている。それをうわのそらで眺めながら、ぐったりと背もたれに体を預けた。

「お疲れさま」

遠慮がちに声をかけてきた和樹に、応える元気がない。気力も体力も全てを持っていかれたようで、指一本を持ちあげることすら気だるく感じる。それも体中に満ちる充足感の表れだと分かっているから、今はそつと身を任せるのみだった。

生ぬるい風に髪を弄ばれながら、ふとただよってきた汗のにおいに、小夏は数分前の映像を反芻する。

歌い終えた瞬間　まるでパズルのピースがあるべき場所におさまるような沈黙が忘れられない。古いスピーカーによって音割れをおこした伴奏も、どよめきから歓声へと色を変えた観客の声も、嘘のように消え去ったあの瞬間が。

（けっこう……無茶、やったわね）

今思えば、ブーイングを受けてもおかしくないことをしたのだ。直後に割れんばかりの拍手が二人を覆ったのは、会場が学校だったためだろう。観客の大半は同じ高校の生徒であったことが幸いした。和樹の登場に誰もが目をみはっていたものの、それも文化祭の出し物のひとつなのだとな納得したらしい。

そして誰ひとりとして、S H E E N Aと和樹を同一人物と受け取る人間はいなかった。

和樹に対して上がる歓声はすべて、椎名和樹という少年への賞賛だった。生徒のなかからS H E E N Aに似ているという声が聞こえたあたりで、彼は目をしばたかせて、そしてくすぐったそうにマイクを握った両手を組み合わせていた。

「おれでもS H E E N Aにはなれないんだ」

ふいに、ぽつりと声がした。心中を見透かされたようでうろたえる。けれど和樹にその気はなかったようで、長い間のあとに言葉を続ける。

「S H E E N Aはおれだけど、それでも」

「……うん」

「おれが歌つても、S H E E N Aのまねにしかない。結局S H E E N Aはどこにもいないんだ。おれの歌を聴いた人間が作った想像でしかないんだ、って」

それなら。

彼が演じつづけたS H E E N Aとは、いったいなんだったのか。この場で歌ったからといって、すぐにS H E E N Aが消えるということはない。これから彼は覆面歌手として楽曲を作っていくだろうし、素性をさらすことはないのだろう。和樹の言ったとおり、

S H E E N A は人々の想像上の歌手として生きていく。

少年として、少女として、青年として　　いくつもの顔を持った彼は、たとえ和樹がその正体を明かしたとしても消えることはない。人の心のなかに生まれ落ちた S H E E N A は、すでに彼から離れてひとり歩きを始めていた。

和樹はさんと輝く日の光に目を細めて、校舎の壁から身を起す。

「だったら、いつか自分として歌いたい。今日みたいに」

言って、晴れた空に向かい大きく伸びをした。

白いシャツからのびる腕は、出会ったころより少しだけ日に焼けている。立ち姿を前にするとその線の細さがきわだって見えるけれど、彼が見た目どりの弱々しい少年でないことぐらいはよく分かっていた。

だから、彼がある。椎名和樹としての道を選び取ることができた彼が。

「あんたが歌い続けるなら、わたしはもっとうまくなるわ」

「負けたくないから？」

揶揄するような口調の和樹に、見えないと分かっているながら首を振った。背を向けた彼にも届くような声を張る。

「一緒に歌っていたいから」

きょとんとした和樹が、小夏を見おろして一度まばたきをした。

とたんに気恥ずかしさが襲ってきて、小夏は慌ててベンチから立ちあがる。いつの間にやら倦怠感はどうに逃げてしまっていたらしい。ふらつくこともなく和樹の前に躍り出て、正面から目を合わせた。

「だから、妥協は許さない。わたし自身にも、あんたにも。椎名和樹を、わたしのライバルだって認めてあげる」

「S H E E N A じゃなくて、いいの」

「顔の見えない歌手を相手に、なにを張りあうっていうのよ」

「……そうだね」

納得したように、相づちを打たれる。どこか気の抜けたその返事

が気に障って、小夏はむつと眉を寄せた。ひとつ呼吸の間があつて、「それじゃ、早くおれを見つけないきゃいけないな」と彼が困り顔で笑う。

「小夏さんが、待つてゐるなら。早く」

自分の名前が出てきたところで引つかかりを覚えたけれど、うなずいてみせる。

彼がそれを意識するしないにかかわらず、そう時間はかからないだろう。ステージに立つ喜びを知ってしまったのだから。自分を待ち望む観客の前で、自分だけの歌を歌う快感に、一度酔つてしまえば抜け出せはしない。

いつか椎名和樹としてとなりに立つ。それは彼にとっての、絶対の約束だ。

和樹が再び、今度は深く、呼吸をした。それに呼応するようにやわらかい風が吹いて、青々と茂った木の葉をふるわせる。となり合う校庭では野球ボールが打ち上げられ、小気味のいい音が空に響いていく。文化祭の騒々しさをどこかへ追いやったその場には、ひときわ濃い夏の雰囲気満ちていた。

その空気に同化するように息をひそめていた和樹が、そつと口をひらく。

「あのさ」

つかの間の躊躇。わずかに視線を揺らして。

「おれ、小夏さんが好きなんだ」

がさつ、という音を聞く。校庭とこちらを区切る金網が、鋭く飛んできたボールを受けて揺れていた。

すこし遅れてそのボールが地面に落ちるまで、その数秒のあいだ、小夏はまばたきも忘れていた。補欠であるらしい少年が金網ぎわを駆けぬけていき、足音が遠くなったころ、やつとのことひきつた笑顔が浮かべる。

「あ……なによ、ファンだっていうんでしょ？ し、知ってるわよ、それぐらい」

「そうだね」

「だから、まだまだ歌手は続けていくし、ファンにだって応えるし、それと、それと、と必死に続きを探した。どうやら思考が空回りしているらしい。早口になっていくくせに、自分の言っていることの半分も理解してはいないのだ。いくつか言葉を連ねてから改めて和樹を見れば、彼はひとりの男の子の顔で立っている。

そうではないと否定することもせずに、かすかに目を細めて、立っている。

とうとうなにも思いつかなくなって、おずおずと切り出した。

「椎名……あの、ほんき？」

「本気」

「ファンだから、とか、じゃなくて」

「それも変わらない、けど。あの、小夏さん」

小夏に向かって踏み出した彼から、反射で後ずさる。それだけで和樹は動きを止めてしまふけれど、小夏は押しとどめるように両手をかけた。

「ちょ……っと、待って！」

今まで頭の中につめこんできたものは、ただのガラクタだったのかと思う。だって、大事なときに動いてくれない。はやくなにか言わねばと急かされるばかりだ。

胸の奥がうるさい。耳の先がかつと熱を帯びて、それを隠すように下を向いた。今のままでは、顔をあげられない。頭上から困り果てる気配が伝わってくるようで、恥ずかしくてたまらなかった。

和樹の靴が、舗装された地面を踏む。けれどそれは距離を縮めるためではない。彼はそうして数歩ぶんうしろにさがって、小夏さんと名を呼んだ。

「上」

「……うえ？」

導かれるように、和樹が指さした空をふり仰ぐ。そして思わず声をあげた。

薄くにじんだ虹がひとすじ、雲のあいだを走っている。注意しなければとらえるのも難しいぐらいの、細く小さなそれが空に橋をかけていた。朝から降りつづいた雨が、そつと残していったらしい。あの喧騒のなかでは、気づいているのは少数だろう。

ぽかんとひらいていた口を引き結んで、小夏はひとつ息をついた。
(虹なんて見るから)

新しい自分の名を作った日のことを、思い出してしまった。そして、思い出したからには聞いてほしいと思ってしまった。彼に対してずいぶんと気がゆるんだものだと思わずに、苦々しくため息をつく。

「雨は、たくさんものを、運んでくるの」
雨、とくり返した和樹に、うなずいた。

「枯れた大地を芽吹かせて、空に虹をかけて、春に夏を運んでくる。だから、雨宮小夏」

雨宮小夏は、歌という雨を届けるために。

デビューを果たしたその日は梅雨の盛りで、オーディション会場の外には土砂降りの雨が降っていた。最終選考は事務所外部の人間を集めて行なわれるため、観客席に座る一般人はそのほとんどが事務所に責任を持たない。素人の歌を聴くためだけに雨のなかへ飛び出すほどに、音楽を純粹に愛する人々だった。

そんな彼らが満足できるような歌を作りあげられたなら、雨に濡れることもいとわれないような音楽を届けられたなら。そして、小夏が歌手を目指すきっかけであったように、憧れのまなざしを受けるような歌手であれたなら。

それは、とても、素敵なことだから。

「わたしの歌を聴いて、歌手を目指したいって思う人が現れてくれたらって。思ってた」

ならば、その夢は、とつくの昔にかなえられていたのだ。

空に打ちあげられた花火が、破裂音を響かせる。残り香のような煙がたなびき、やがて空に溶けていった。さっきまで目の端にとらえていた虹も姿を消していて、ただひたすらに青と白だけが天を覆っている。

一般客への公開の時間が終わった。やがて生徒間だけで中夜祭がひらかれ、翌日には文化祭は最後の盛り上がりを見せるだろう。小夏や和樹、三年生の夏は、そうして終わっていくのだ。

「じゃ、いきましようか」

体をぴんと伸ばして、小夏は和樹に声をかけた。どこにと問う彼に背を向ける。

「中夜祭が終わったら事務所。野宮さんに怒られるの、つき合ってくれるんでしょ？」

今ごろかんかに違いない。街じゅうにポスターを貼りだしたにもかかわらず制止の声がかからなかったのは、彼女がぎりぎりのラインで計画を許してくれたからだだろう。それでもたてまえというのは存在するから、一応は雷を落とされておかねば双方の面目が立たない。

逡巡してから顔だけを後ろに向けて、言った。

「誰も一緒に行かないなら、中夜祭もつき合うけど」

「……いい、いない、誰もいない！」

大きく首を振られる。そうして、小夏にもうつりそうな勢いで幸せそうに微笑んだ。

和樹の告白への答えは、きつとまだ先になる。彼の勇気を無下にするつもりはない。だからこそ、こちらにも考える時間が必要だった。

自分たちは全速力で夏を駆けぬけてきたのだ。今からでも歩幅を落ちつかせてもいいだろう。自分が和樹に答えを返すのも、彼が自分を見つけるのも、いくらか時間をかけても許されるはずだ。

夏は、もうすこしだけ、つづくから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6825y/>

レイニーソング

2011年12月20日21時22分発行